

学術論文

プロヴィデンス号来航異聞—蝦夷地，松前，ロシア—

吉 田 俊 則

富山大学人文科学研究第 80 号抜刷

2024 年 2 月

プロヴィデンス号来航異聞—蝦夷地、松前、ロシア—

吉 田 俊 則

はじめに

1796年9月、一隻の異国船が蝦夷地を訪れた。ウィリアム・ロバート・ブロートン率いるイギリス軍艦プロヴィデンス号である。航海の目的は当時まだ全貌が知られていなかった東アジア北部の海岸線を踏査すること、とりわけ現在のサハリン島（樺太）海域を探検し、海峡の有無を究明することであった。蝦夷地では南にある内浦湾¹⁾に進入して、その北東岸の虻田と東岸の絵鞆の入江（白鳥湾²⁾、現在の室蘭港）に寄航し、蝦夷地の一部を領有する松前藩³⁾の家士たちと交渉をもった。このときの出来事はブロートン艦長の残した航海記にも記録されているが、より詳しい記述は日本側の史料のなかにある。

筆者は2021年10月にブロートンの航海記を翻訳出版した⁴⁾。そのとき残された課題と感じたのは、そうした日本側の史料を紹介・分析し、蝦夷地で何が起こったかを日本側の視座から再現することであった。この出来事を記録する日本側の史料はいくつかあるが、もっとも詳細にわたるのは大原左金吾の「地北寓談」である。この書のクライマックスはプロヴィデンス号来航事件と、それが引き起こした松前城下の騒動であるが、そこに至るまでには、蝦夷地をめぐる松前藩とロシアの対立、交渉、「内通」のありさまが語られている。

本稿では、史料としての「地北寓談」を批判的に検証しつつ、その作者で、来航当時松前に寄寓していた大原左金吾、松前藩前藩主で隠居の松前道広、道広の庶弟にして家老の蠣崎波響などの動向を注視しながら、プロヴィデンス号来航に至る前史と、来航そのものが引き起こした北辺の動揺、その諸結果を再構成し、叙述してみたいと思う。

1) 内浦湾には噴火湾 Volcano Bay という異称があるが、湾岸に噴煙を上げるいくつもの火山を見たブロートンがこのときの航海で名付けたものである。

2) 松浦武四郎はこの入江のアイヌ語地名「ハクチャウマ」に「今白鳥の沼と云う」と解説をつけている。松浦武四郎（吉田常吉編）『新版蝦夷日誌（上 東蝦夷日誌）』、時事通信社、1984年、84頁参照。

3) 蝦夷地においては、渡島半島南部の「和人地」とその外とが峻別されていた。蝦夷地は次のように定義された。「西は熊石、東は亀田、両所に関所ありて、是より外は蝦夷地とす。…故なくして蝦夷地への往来を禁ず」（「北海随筆」）。木村礎他（編）『藩史大事典』第一巻（北海道・東北編）、雄山閣、1988年、3頁参照。

4) W.R.ブロートン（吉田俊則訳）『ブロートン北太平洋航海記』、東洋書店新社、2021年。原著はW.R.Broughton, *A Voyage of Discovery to the North Pacific Ocean*, London, 1804.

目 次

- I 地北寓談という奇書
- II 大原左金吾と松前道広
- III ロシアの幻影
- IV 告白
- V プロヴィデンス号来航
- VI 船上の日英邂逅
- VII 出陣
- VIII 告別のとき
- IX 英国船再来
- X 真偽の在りか

I 地北寓談という奇書

次に引用するのは「地北寓談」序文の一節を現代文風に改めたものである⁵⁾。

北海に魚あり。その名を鯤^{こん}という。鯤の大きさは百里、(海の荒ぶるとき)変身して鵬^{おとり}となり、南の大海に羽ばたくという。だが海の動くことはなく、鯤はそれを嘆き、天主に訴え出た。天主は訴えをみとめ、つむじ風をあたえんとの気配であった。鯤はよろこび、そして語るに、「我は聞く、水に泳ぐものは鰭^{ひれ}を用い、風に羽ばたくものは翼をもってなすと…いま我には鰭あれど翼なし。」どこかへ行ってそれを獲得せんとし、あまねく探し歩いてようやく翼を手に入れ、朝夕これを身につけて飛翔を学んだ。すると翼が哄笑して言う、「我は鳥の翼、魚の翼ではない。魚がいまだ変身もせぬうちに翼を求むるは狂気の沙汰、早計も極まれり。我、何ゆえにこの狂魚のため汚水につかり、身を汚さねばならぬのか」、そう言って翼は、鯤の眠れるうちに飛び去ってしまった。

こんな夢を見て驚き目覚めると、私の枕上に三巻の書があった。その名を地北寓談という。

5) 地北寓談(大友喜作編『北門叢書』第三冊所収、北光書房、1944年)91頁。地北寓談を引用するときは、以下も同様に筆者が一部を現代語風に改めた文章を使い、「地北寓談」の詳しい該当箇所を割註または脚註に示す。また、後出の「墨斎奇談」の引用も同じようにおこなう。

この謎めいた序文にはじまる地北寓談は、一見するかぎり奇書ととってもいい作品である。書かれた当時、ある事情から密書とも呼ばれ、昭和18年に刊本となるまでは人の目に触れることもあまりなかった。奇書たるゆえんは色々あるが、実在した人物と地名がすべて変名で登場すること、また、記録の文学に似つかわしくない小説体で語られていること、そしてなによりその内容があまりに破格で艶めかしかったことがあげられよう⁶⁾。それにもかかわらずこの本は、今日まで松前町史や北海道史、室蘭市史など、関係する地方史概説書にしばしば史料として引用され、根拠として使われてきた。ほかでは知りえない内容がこの本に詰まっていたからである。

作者大原左金吾は、寛政七（1795）年、松前藩の招聘に応じて津軽海峡を渡り、賓師として処遇され、ときの藩主松前章広をはじめとした藩士たちに儒学や兵学を教えた。左金吾を招いたのは当時は隠居の地位にあった先代の藩主松前道広であった。

道広の号は鯤州である。そして左金吾はその本名を翼と称した。松前に招かれた左金吾はいずれ道広の野望を悟ったと思い、身の危険を感じて松前城下から遁走することになる。莊子「逍遙遊篇」⁷⁾をモチーフとした鯤と天主と翼のこの寓話は、天主をロシアと見立てれば、そのままこの書物の戯画化された、あるいは象徴化されたあらすじといってもよい。

そもそもこの書物が書かれたのは松前道広のロシア内通疑惑に関係している。巨魚鯤は翼長三千里の巨鳥と化して天空に舞うとの野心を抱いた。鯤州こと松前道広の野心は北辺の小領主が天主たる「ロシア大王」の後ろ盾を得て解き放たれ、天下に号令を下すこと、大原左金吾の胸中には、松前で一年あまりを過ごすなかでそのような疑惑が醸成されていったのである。

寛政八（1796）年旧暦十月、道広の引き止めるのを振りはらって松前を脱出した左金吾は津軽海峡を渡って本州を南下、水戸藩に向かい、その地で高名な儒学者で当時彰考館⁸⁾総裁であった立原翠軒^{すいけん}に面会し、道広のロシア内通疑惑を告発する。翠軒はもともと蝦夷地に深い関心を寄せていて、門弟木村謙次を調査のため蝦夷地に派遣するほどの人であったから⁹⁾、門人たち

6) 地北寓談という書名は中国清代の詩人王士禎の「池北寓談」をもじったもので、漢籍に造詣の深い同時代人は題名を聞いただけで靈異譚をまとめたこの書物のイメージが重なったのかもしれない。

7) 莊子「逍遙遊篇 第一」の一、金谷治訳注『莊子 第一冊 [内篇]』、岩波文庫、1971年、17-18頁参照。

8) 徳川光圀が「大日本史」編纂のために設立した編纂局。江戸小石川にあり、その後水戸にも置かれ、水戸藩主徳川斉昭のとき水戸に統一されて、水戸学の中心となった。

9) 木村謙次は、1792年のアダム・ラクスマン来航に際して「立原先生ヨリ窃に我儕二人、赤狄、蝦夷ノ動靜、虚実ヲ偵探シ来ルベキコトヲ命ゼラル」と記す。「北行日録 上」、山下恒夫編『大黒屋光太夫史料集』第三卷（伊勢二漂民の懐旧談・ロシア資料）、日本評論社、2003年、51頁。

に筆記させた左金吾の陳述¹⁰⁾を幕府要路に通じる知人、江戸の医師加川元厚に託した。その一部に翠軒自身の加筆を含んで、のちに「墨斎奇談」という一書となるこの陳述は、加川から知人を介して水野出羽守忠友に伝わり、ときの老中首座松平伊豆守信明^{のぶあきら}の知るところとなった。この穏やかならぬ話を聞いた信明は陳述をあらためて文書にするよう命じ、左金吾が筆を起こして地北寓談三巻ができあがった¹¹⁾。昭和十八年の刊本で300頁に近い大部の書である。

松前道広のロシア内通疑惑は、松浦静山^{まつらせいざん}の「甲子夜話」に「寛政の末か、異国への通路ありて、(道広に)灰かに野心あるなど取り沙汰され…旧領は官(幕府)に召しあげられ、その身は永蟄居仰付られき」と言及され、最上徳内の「松前氏と魯西亜内通のことありて書翰の如きも見及びたれば江府へ言上せしこと有りし」という証言が引用されるほど、江戸時代後期の一時期には知る人ぞ知る話でもあった¹²⁾。その真偽は果たしてどうなのか、つまり地北寓談の書物としての信憑性をどのように見るべきなのか。江戸、明治、そして今日まで、この書物の真偽はさまざまに見立てられてきたが、その真偽は重要な問題であるから最後にあらためて考察するとして、まずはそこに描かれた物語をひもといてみよう¹³⁾。

Ⅱ 大原左金吾と松前道広

大原左金吾はその名を翼、字を雲卿、号を呑響^{どんきょう}または墨斎^{ぼくさい}といい、左金吾は通称である¹⁴⁾。仙台藩領大原(現在の一関市)に生まれ、儒学者、兵学者、画家として当時それなりに名をなし、家族とともに京都に暮らし、文人仲間の交際のなかにいた。天明三(1783)年か四年、左金吾は松前に渡ったことがある。松前藩は石高によらない特異な藩であり、背後にひろがる蝦夷地の風物とともに人々の関心を集め、少なからぬ文人たちが訪れて紀行文を残した¹⁵⁾。左金吾の松前もそうした旅のひとつだったのであろう。

10) このとき翠軒とともに左金吾の告発を聴いた門人のうちには、若かりし頃の藤田幽谷(藤田東湖の父)、小宮山楓軒など、のちに名を残す学者たちが加わっていた。菊池喜一編『大原歴史散歩』、大原史談会、1984年、77頁参照。

11) 森銑三「大原左金吾」(『森銑三著作集』第七巻、中央公論社、1971年)、492頁参照。

12) 松浦静山は平戸藩主。日本列島の両端にある平戸藩と松前藩の静山と道広は江戸出府に際して接触があった。甲子夜話は静山が文政四(1821)年から20年間に渡って書き続けた随筆集。正編・続編ともそれぞれ百巻に及ぶ。引用箇所は続編巻の二一と巻の五七。

13) 以下の叙述は基本的には「地北寓談」と「墨斎奇談」に基づく。前者は大友喜作『北門叢書』第三冊に所収のものを、後者は国会図書館所蔵の写本マイクロフィルム版を利用した。

14) 大原左金吾の履歴については『大原歴史散歩』、54-92頁参照。

15) 平秩東作「東遊記」(『日本庶民生活史料集成』第四巻、1969年所収)、古川古松軒『東遊雑記—奥羽・松前巡見私記』(東洋文庫、1964年)などが有名。左金吾も地北寓談のなかで、「貴藩は民も異なり、産物も異なるゆえに、世に異なるものを見ようとして、密かに遊ぶものが多い」と道広に語る(191頁)。

松前で左金吾は蠣崎波響の邸に寄寓した。蠣崎波響は松前道広の庶弟で家老職を務めながら、画技を円山応挙に師事し、有名な連作画「夷酋列像」を残した画家でもあった。左金吾も円山派の画家であり、そのあたりが両者の懇意のゆえんだったのかもしれない¹⁶⁾。この波響が寛政六（1794）年、京都に左金吾を訪ねた。このときは私的な訪問ではなく、藩の使者として随員をしたがえた公式訪問であった。

波響は左金吾に兵学等の教授のために松前へ渡ることを要請し、左金吾はそれを受けた。寛政七年旧暦五月、左金吾は従者とともに京都を出立、いったん江戸に入り、それから奥羽路を北上、仙台に数日滞在したのち、津軽半島の三厩から海峡を渡って七月下旬に松前に到着、今回もまた波響の邸に身を寄せることとなった。海に面したその邸宅の南東の一角には波響楼と名付けられた高樓があり、左金吾はしばしば樓上から出船入船で賑わう松前湊を見下ろしたという。

左金吾が松前に到着したその日の午後、まだ旅装も解かれぬうちに松前道広が波響邸を訪れた。そして左金吾に向けて放った最初の言葉が「先生、千里の道のりを経て死地にやってきた、そのことをご存知か」という謎の一句であった¹⁷⁾。

松前道広は第八代藩主であったが、あるときに幕府の不興を買い、寛政四（1792）年、表向きは病気を理由にして藩主を退き、十八歳の息子章広に家督を譲って隠居となった¹⁸⁾。それ以来道広はおおいのすけ大炊介を名乗り、隠侯と呼ばれるようになる。まだ三十九歳の若さでの隠居はもちろん幕府の意思によるものであった¹⁹⁾。だが江戸から遠く離れた辺地松前のこと、幕府のそうした意向もものかは、藩政の実権は依然として道広が握っていたから、先述のように、左金吾の招聘も道広の発意にほかならなかった。

道広という人はなかなかの英傑で才気あふれる武人だったと知られる。あるとき道広は左金吾に次の心情を伝えた。

16) 蠣崎将監広年、雅号を波響と称した。波響については永田富智『松前絵師 蠣崎波響伝』、道新選書、1988年及び中村真一郎『蠣崎波響の生涯』、新潮社、1989年を参照。また、森銑三「大原左金吾」、464頁には左金吾と波響がいかにして知己となったかの考察がある。

17) 地北寓談 107頁以下にこのときの出会いの場面があるが、この発言そのものは墨斎奇談の冒頭に収められている。墨斎奇談 2頁。ただし墨斎奇談の頁数は、原書に頁番号がないので、国会図書館所蔵のマイクルフィルム版の本文 1頁目から筆者が順に番号を付した仮りの頁数であることをお断りしておく。

18) この隠居は「国隠居」という厳しい措置で、国元に留まることが義務付けられた。『松前町史』通説編第一巻下、1988年、85頁参照。

19) 老中首座であった松平定信の不興は道広の放埒な暮らしぶりが一因とも言われるが（本稿註 30 参照）、直接には2つの事件が原因であったという。寛政年間に、ときの光格天皇がその父に尊号を贈ろうとした尊号一件と、將軍家斉がその実父を江戸城西の丸に迎えて「大御所」の称を送ろうとした大御所問題、いずれも定信が反対して差し止めとなったが、京都の公家社会と縁薄からぬ道広は関与を疑われた。『松前町史』、通説編第一巻下、84頁及び『新撰北海道史』第二巻通説一、1937年、322-323頁参照。

古来、儒教や仏教、老莊思想を学ぶ者、欲を断ち、務めを逃れて世を笑い、^{おのれ}自己の
みを尊び、生涯に一事をなすこともなく…遂には草木とともに朽ち果ててしまう者
のなんと多いことか…〔地北寓談311頁〕

死は誰しも逃れることができない。聖人も愚者も、帝王も良民も死は免れず、それ
ゆえ、為すことなくして世を渡るのは、手をこまねいて死を待つことにほかならず、
これは生きながらの死ではないか。〔312頁〕

道広のこの哲学はなるほど戦国武将なら抱いていたかもしれない使命感と切迫感、そして野
心といささかの苛立ちを秘めているが、うちつづく太平の世ではその捌け口のありそうもなく、
それが道広を苦しめたのだと左金吾は見立てた。

道広はさらに左金吾に「我が藩は北辺にあり、どのように治めるべきか」〔地北寓談118頁〕
とたたみかけた。その性急さと、松前到着時、すでに自身の持病が悪化していたこともあいまっ
て、少し当惑しながら左金吾は自説の要点を披露したという。

大原左金吾は、寛政七（1795）年旧暦七月から寛政八年十月まで松前にいた。波響と交わし
た約束は一年限りだったので、寛政八年の六月か七月には松前を去る予定であり、本来ならプ
ロヴィデンス号が最初に来航した寛政八年旧暦八月（プロトン航海記の新暦では9月）には
すでに松前を辞し去っていたはずである。そうならなかったのは、左金吾が辞去を切望したに
もかわらず道広がそれを許さなかったためであるが、そのおかげで来航が引き起こした日本
側の騒動を左金吾がつぶさに記録し後世に残すという幸運を得た。とはいえ、道広が自分を引
き留めたのはロシア内通疑惑と関わりがあると左金吾は考えたので、プロヴィデンス号来航事
件もそのような文脈で解釈されており、事実の吟味には特段の慎重さが求められるという事情
がここにはある。

Ⅲ ロシアの幻影

ロシアは、シベリア征服を成し遂げた17世紀中頃から、昔も今も日本の変わらぬ隣人であり、
ときとして脅威と感じられてきた歴史がある。冒頭に述べたとおり、プロヴィデンス号が来航
した18世紀終わりの数十年は、日本人がいまだ蝦夷地や千島列島、サハリン島（樺太）の完
全な地図を持たず、その全貌を知らなかった時代、工藤平助の『赤蝦夷風説考』が世に出た時
代であり、その後も長く尾を引くロシア脅威論のいわば黎明期であった。

そうしたなか、プロヴィデンス号に先立つこと4年の1792年新暦10月、アダム・ラクスマ
ンのロシア使節がエカテリーナ2世号で根室に来航する。使節は伊勢国の漂流民大黒屋光太夫

らを日本側に引き渡すことと通商を開くことを求めてやって来たのだが、まずは根室で越冬し、翌年の6月箱館に入津、そこから陸路で福山（松前）に向かった。ラクスマン来航の直前、寛政四（1792）年の旧暦六月、ある事情から道広が幕府に隠居を願い出て許されたことは先に述べた。その結果、十月には息子の章広が藩主となる運びであったが、少なくとも江戸幕府の2名の宣諭使²⁰⁾が到着して事態を掌握するまで、松前藩の対応を指揮したのは道広にほかならず、そのもとで家老松前左膳広政が諸事を処理した。

根室現地で応対にあたったうちの一人は、道広の腹心で藩医の加藤肩吾であった。加藤肩吾はラクスマン一行の根室越冬に随行し、約半年間行動をとともにした²¹⁾。そのとき学び覚えたロシア語が、後年、来航したプロヴィデンス号のロシア人水夫を介してプロトン艦長との意思疎通を可能にするのである。

おそらく道広はこのときはじめて間近にロシア国とロシア人を経験したのであろう。墨斎奇談はそのときの模様を次のように描き出す。幕府の宣諭使はラクスマンに信牌²²⁾を交付して長崎に向かうようにと諭したが、ロシア側は「長崎ハ遠クテ行コトハイヤジャ（行くことは嫌じゃ）」、「日本人コハクナヒ（怖くない）、アマリ六カシケレハ（難しければ）、イクサ（戦さ）ガタントクル」と日本語で答え、松前城下では槍の林立する藩兵の列を尻目に、くつろいだ様子であったという〔墨斎奇談8-9頁〕。語ったのが誰かは分からないが、ラクスマンの使節には故国への帰還のために十年来ロシアで苦闘してきた光太夫、小市²³⁾、磯吉ら日本人のほかに、日本語を使う二人のロシア人通詞、トゥッグルーコフとトラペーズニコフが加わっていたから、そのどちらかの発言ということであろうか。ロシア人の申し出についてはすべて江戸に伺いを立てねばならぬと宣諭使が説明すると、「三百里の彼方にいちいち尋ねるのか、（松前）若狭守様がここにいるのは何のためか」と嘲笑したという。こうしたやり取りがあつてなお、江戸への報告書には「ロシア人たちが長崎回航のことをありがたく受け止め、万事順調に処理された」と書かれた〔墨斎奇談9頁〕。できるうちは不都合な事実を隠して事態を穏便に収めようとする、今の世にも通じるこうした官僚主義はいずれほころび、幕府の北方政策の大きな転

20) 幕府の意向を伝達するための使者。このときは幕府目付の石川将監忠房と西の丸目付の村上大学義礼が任命された。

21) このときの経験をもとに加藤は18世紀のロシアに関する本「魯西亜実記」を書き残した。村山七郎「加藤肩吾著「魯西亜実記」（魯西亜紀聞）の文献学的研究」、『順天堂大学体育学部紀要』、第10号、1967年参照。

22) 徳川幕府が長崎に来航する中国船に交付した入港許可証。この信牌を携えて1804（文化一）年レザーノフの使節が長崎に来航した。レザーノフ（大島幹雄訳）『日本滞在日記』（岩波文庫、2000年）の396頁にこの信牌の本文訳が掲載されている。

23) 小市は根室で病死し、生国伊勢への帰還を果たせなかった。光太夫らの帰還について、『大黒屋光太夫史料集』第三巻（伊勢二漂民の懐旧談・ロシア資料）を参照。

換に帰着することになる。

このとき道広は少し異なる感想を抱いた。ロシア人たちの剛胆さに感服するとともに、彼らが自分らの船の構造や所有する地図や書物、言語の知識を惜しげもなく日本人にあたえるのを見て、「彼らの度量が大きいこと、なかなか他国の人の及ぶところではない」〔地北寓談 124 頁〕と述べたという。

地北寓談には、松前に来てから半年以上経った寛政八（1796）年春の左金吾の心境が「快々^{おうおう}として鬱を語るの友なく」と書かれている〔地北寓談 199 頁〕。この間左金吾は、ロシアの進出から蝦夷地を守るための方策や、殖産、開墾、「夷人（アイヌ人）教化」の策などをしばしば提言してきたが、道広はそれらをありがたく拝聴する様子ながら、いっこうに具体化し実行しようとはしなかった。左金吾の松前で初日、道広は、小藩の願いを聞き入れ、はるばるやって来た左金吾に丁重な謝辞を送るとともに、「年来、先生の高風を切にお慕い申すところ、先に波響からお伝えさせたとおり」と賛辞を捧げ、しばらくは左金吾と道広の間には懇ろな交際があった〔地北寓談 107-108 頁〕。2 人のそうした親密な間柄に、半年を経て隙間風が吹きはじめた気配が見てとれるのである²⁴⁾。

さて、この年の旧暦三月、道広が左金吾にある風説を打ち明けた。道広は左金吾を呼び出し、「膝をすりよせ、密かに」語った〔地北寓談 159 頁〕。去年の冬、奥蝦夷から帰還したある藩士が現地で聞いた話がある。アイヌ人が交易のためにロシア人のもとへ赴いたとき、その土地に一つの噂が広まっていた。それは「来年日本へ侵攻するので、お前たちは干し肉をたくさん蓄えておくようにという命令がロシアの王より下された」というものであった²⁵⁾。

ここでいう奥蝦夷とは千島の島々である。干し肉を蓄えるとは軍糧の確保にほかならない。その地には^{らっこ}狐の毛皮を目的としたロシア人たちがしばしば渡来し、ときには松前の藩士たちと接触した。そしてこの「来年」こそがまさしく寛政八年、つまりプロヴィデンス号来航の年であり、松前城下へその一報がもたらされたとき、藩中枢の人々がすわロシア船来寇かと考えたのも無理からぬことであった。

密談の体でこの話を聞いた左金吾は、道広がそれを幕府に報告していないことを知ると、直

24) 地北寓談「左金吾はじめて大炊介殿の實心を察する事」の節、とくにその 192-193 頁には「色を正しくして」大炊介の発言を批判する左金吾と、自らの発言を隠居の戯言と称して、気にするなかれと逃げを打つ道広の姿が描写されている。

25) 地北寓談「大炊介殿ひそかに夷の風説を語る事」の節（158-167 頁）。節の題名にも、もちろん本文にもすべて変名が使われているが、煩雑になるので、ここでは実名に変換して引用した。以下の叙述でも同じように実名へ変換してあるが、実名の判明しない場合には変名のままとしてある。実名への変換には、第一に、実名で記述されている「墨斎奇談」と比較対照したが、それ以外に、「寛政十年家中及扶持人列席調」（『松前町史』史料編第一巻 1974 年に所収）と久保泰編『松前藩家臣名簿』、2021 年を参照した。

ちに注進するようにと諫めた。^{いさ}だが道広は言を左右にしてその忠告に従おうとしなかった。夷人の言は虚実相半ばしているとか、もし幕府に報告すれば幕府の役人が踵^{きびす}を接してやって来るのでその接待の費用だけでも莫大なものになるとか、あるいは米の移入に頼って暮らす松前藩でロシア来寇のうわさがたてば入船がすっかり姿を消し、城下が飢えにさらされるとか、最後に、幕府に報告したものの実際には来寇がなかった場合、軽率な注進を咎められようといった理由を次々に持ち出した〔地北寓談161頁〕。こうしたやり取りが左金吾の心中に疑惑を芽生えさせていくのである²⁶⁾。

IV 告白

左金吾の心中で疑惑の芽がどのようにして膨らんでいったか。地北寓談にはそのことを記した「左金吾ひそかに氏家源治を訪ふ事」〔195-203頁〕、「氏家源治が妻、大炊介殿の密謀を語る事」〔203-231頁〕という二つの節がある²⁷⁾。氏家源治は左金吾が旧知の松前藩士である。大炊介とは隠居後に道広が使った名であることはすでに述べた。この二節は、地北寓談のなかでももっとも際どい秘話が語られている箇所、その真偽は十分に吟味される必要があるが、ひとまずその評価を控え、この二節をもとにして松前道広ロシア内通疑惑の核心部分をひもとう。

松前藩に氏家新兵衛という藩士がいた。この人は寺社奉行などを務めた能吏として知られたが、その娘に藩内きっての美女と謳われたよし²⁸⁾女がいた。新兵衛はよしの夫に、やはり寺社・町奉行などを歴任した重臣高橋又右衛門の三男を婿養子に迎え、それが氏家源治であった。ちなみに源治の実兄は高橋莊四郎といい、プロヴィデンス号「漂着」のときに道広の命をうけて真っ先に馬上の人となって現地に派遣された俊英の武人である。

よし女について地北寓談は次のように描き出す。

その美貌藩中にならぶものなく、年長ずるにつれてすこぶる筆硯（文筆）を好み、和文はもとより、遠くもろこしの書までもたしなみ、歴史書にも通じ…和歌を詠じ、茶を点じ、香を聞き、まことに才貌兼ね備えた「四徳全有」の女性である〔地北寓談195-196頁〕

26) ロシア人来寇の噂は、筆頭家老の松前左膳広政も知るところで、左金吾に「安からざりしとおもへり」と告げ、その手当の必要を説いたときの道広の反応は、近年藩の命令に従わぬアイヌ人が多く、彼らに「罰法を施さん」という、辻褄の合わないものであったと述べている。地北寓談、188頁参照。

27) これら2節の題名及び本文にも変名が使われているが、実名に変換して引用する。以下の引用でもいちいち断らずに同じ手法を用いる。源治という名は文献によっては「源治郎」と表記されることもある。

28) 娘よしの名もおそらく変名が使われているが、実名が確認できず、変名のまま記す。

これが事実か否かは気になる問題ではあるが、ここでは素通りする。問題は道広がこの妻女に心を奪われ、氏家家の当主新兵衛がラクスマン来航事件の事後処理のために江戸に派遣されていた間隙について氏家家に入り浸り、趣味の浄瑠璃などを披露して妻女を自分の後房に招き入れようとしたことであった。地北寓談は、道広がよし女の宅を訪れること一月に十度あまり、その行状は人々の口の端に上ったと記す。また、謹厳で職務に忠実であるがゆえにこれといって非の打ちどころのない夫の源治を遠ざけるため、絵筆に優れた源治を箱館と江差の絵地図の作成に派遣し、わざわざ不在を作り出して一方的な逢瀬をつづけた〔地北寓談 197 頁〕。

ちょうどそのころ左金吾が氏家源治宅を訪れた。この2人は天明年間（ほぼ1780年代）に左金吾がはじめて松前を旅したときからの親しい知友であった。左金吾は、賓師として招かれたこのたびの松前行においては、待遇として家老より上という自分の立場を思慮して、氏家源治との交際を控えていた²⁹⁾。だが「快々^{おうおう}として鬱を語るの友なく」の心境のさなかに、打ち解けた人付き合いの慰みを求めてようやく源治宅を訪問したのであるが、このとき源治とその妻よしは道広の圧迫を受けて左金吾以上の苦境に立たされていた。

久闊を叙したのち、二人のあいだで覚悟を決めた「赤心」の会話が繰り広げられた。呼び水は左金吾が道広との行き違いをほのめかし、「遂にわが志も達しまじきを知れり」〔地北寓談 200 頁〕と心情を吐露したことであった。源治は「あなたが赤心を聴かせてくれるのならば、小生にもまた申すべきことがある」〔地北寓談 201 頁〕と応じた。ここから先には、道広の所業への非難を口にすることが忠節にもとるのではと悩む源治に対して、君主にもし悪あればそれを諫めて国を救うことこそが真の忠節であると説く左金吾とのやり取りがつづき、ついには二人してよし女の居室に場所を移して、ことの震源に囚われていたよし女の告白を聞くのである。

よし女は夫源治に寄り添いながら、左金吾に向けて次のように語った。

さて過ぎたある年、隠侯（道広）がこの家へお出でになり、歌舞音曲の催しをなされました。はじめは世につねの娯楽にすぎないと思っておりましたが、あるとき隠侯はひそかに妾^{わらわ}をそばにお呼び寄せになり、数年来妾にお心をお寄せになられていることを、繰り返し気炎をお上げになって妾にお諭しになりました。妾は憤んで拒絶いたし、こう申し上げました。隠侯は英知にすぐれ、武道にも長け、いまの藩主

29) 賓師という立場に加えて、すでに左金吾が聞き及んでいた道広の「醜行」も疎遠に振る舞う理由であった。醜行とはよし女への道広の執着のことであるが、源治がそのことを左金吾に漏らすのではという疑いを道広が抱くのではないか、そうした懸念が左金吾を源治から遠ざけたとある。地北寓談、188-189 頁。

がまだ若年であらせらるるがゆえに、お側で政^{まつりごと}をお助けになっておられます。これまで過ちが生じたときも、それを改めて徳にすすみ、善政をおこない、民に敬愛されて藩主の鏡ともなるべき存在でございますのに、このような不義を思い付かれるとはご本心とも思われますまい…

卑しき妾が知る古き戒めでは、女は夫を天となし、ただ一夫にのみ仕えるものと申します…いま卑しき妾には源治と申す夫があり、これを天といたします上は、隠侯の仰せといえども、これだけは承服いたすわけにはまいりませぬ、そう覚悟いたし、さまざまに申し上げたのも虚しく、なお隠侯のお心にお変わりはなく、その後もしばしばご来訪なされました³⁰⁾。〔地北寓談204頁〕

よし女は、隠居とはいえ君主にはかならない道広の要求を拒絶しつづけ、道広はあきらめず通い、そして諭した。

あるとき隠侯は…次のように仰られました。余がつらつら考えるに、余には側室^{おおせ}が多数いるので、朝に慈しまれても、夕には棄てられるのではという儚^{いはな}さを感じ、汝も内房に入ればそのような境遇となり、「秋風を恨みしむかしの身にひとしくなりなんや」との躊躇^{いっく}ではないのか。そもそも余が汝を慕^{はかな}うのは、ただその器量、艶色^{なんじ}のみに心惹かれたからではない…汝は古今の歴史にも通じ、思慮深く、余が感じ思うのはそうしたところにある。

道広はこの慕情が並々ならざることを示すために「余の大業を聞かせよう」とつづけた。「親子兄弟にも話すべきではない」大業を打ち明けて真情を示し、「汝が我が心に従うのであれば共に企てよう」と誘った。その大業とは次のごとくであった。

そも我が大業というのは天下を支配しようとの企みである。余がもし乱世に生まれていれば、こうした企みがあってもものの数ではないのだが、不幸にして余は平安の世に生まれ、法の外に一步も出ることが許されず、いまこのような小藩で何かをなそうとしても叶わぬ願いというもの、…かねて聞くとところによると、赤夷（ロシア

30) 道広のこうした放埒については、北海道史や松前町史の概説に繰り返し記載されている。例えば『新撰北海道史』（第二巻、通説一）には「数多の婦女子を寵し、参観の際、吉原の娼婦を落籍し、是を福山（松前）に伴ふこと二回に及んだ」（321頁）とあり、『松前町史』（通説編、第一巻下）、81頁にもほぼ同様の記述がある。いずれの記述も地北寓談を典拠としている。併せて本稿の註19を参照されたい。

人)は諸州を併合しようとしている。これはまことに驥尾^{きび}に付いてことをなす絶好の機会ではないか。〔地北寓談206頁〕。

驥尾に付いてことをなすとはすぐれた先達に付き従って功を立てるの意である。ロシアが蝦夷地に攻め入ったとき、それを防御するのではなく、その尖兵となって諸国を平定し、辺境の小藩から成り上がって号令を下す。これが君侯の口説き文句とすれば、ただ独りそれを聴いたよし女がどれほど戦慄したかと想像する

道広はすでにそのための手を打っていることも語った。地北寓談は次のように伝える。

先年、数十人のロシア人たちがラッコ猟と称してわが蝦夷地のほとりに移り住んだが、そのうちの三人の者が罪を犯したとのことで我が領内に逃げ込み、なんとなく怪しい様であったと聞いた。そのときふと思いつくことがあり、足輕の才右衛門³¹⁾を呼び寄せ、ことによってはたくさんの褒賞を取らせようと言い含め、彼の地へ遣わし、ロシア人に近づかせ、彼らと親交をむすばせ、我が志を伝え、そのあと彼らを返して(ロシアの)帝王に伝達せしめ、もし日本に攻め込む意思あらば、我らが先鋒となって攻め込もう、帝王を後ろ盾として、長く天下の統領となるつもりであることを伝達させようとした。ロシア人が日本に攻め込むとしても国民を皆殺しにはしないであろうし、帝王が欲するものを貢税として納めることになれば、臣従するといえども本邦の主となる望みは達成されようと思った。こうして才右衛門が現地に赴いたときロシア人はすでに帰途についたあとだったので、彼は空しく帰藩したのだという³²⁾。

先年とのみ書かれているこの事件は一体いつのことか、あるいはほんとうにあった出来事なのか。『松前史年表』によれば、少なくとも1770年代からロシア人がしばしば厚岸や国後島に出没し、ラッコ猟をし、松前藩士と接触して通商を求めることがあった。安永七(1778)年には30人ほどのロシア人がウルップ島にやってきて、国後アイヌの酋長ツキノエを先導役として交易を求めてきた。翌年にもイルクーツクの商人シェバリーンら40人以上がやはりウルップ島に渡って交易を求めた³³⁾。道広が語ったのはこれらの事件のいずれかなのか、あるいは記録に残らなかった同種の接触のことなのか、残念ながら確定することはできない。

不首尾に終わった接触のち時が流れ、寛政四(1792)年、大黒屋光太夫らを連れてアダ

31) 才右衛門もおそらく変名であるが、実名を確認できないので変名のままとする。

32) 地北寓談、206頁。墨斎奇談、6-7頁にはロシア人蝦夷地進出に関する記述があり、ロシア人がまず蝦夷地で亡くなった人の埋葬を松前の役人に願ひ出、次いでそこに教会を建てることを求めという具合にして、徐々に蝦夷地に浸透してくるありさまを叙述している。

33) たとえば『松前史年表』や『新撰北海道史』第二巻通説一、276-277頁を参照。また、「松前家記」には宝永七(1778)のこととして霧多布に29人のロシア人が交易を求めてやってきたという記述がある。『松前町史』史料編第一巻、22頁。

ム・ラクスマンの使節が根室に来航したのは先述のとおりである。このとき道広は侍臣4名を送り出し、そのうちの1人が加藤肩吾であった³⁴⁾。彼らにはロシア語の習熟を命じ、ラクスマンの思惑を探らせた。長崎への回航をロシア側が渋るのはしばしばロシア人進出への警鐘を鳴らしていたオランダ人の眼を気にしてのことではないか、道広はそう推理したという〔地北寓談207頁〕。

地北寓談の語るところ次の箇所が核心となる。

ロシア使節が松前から箱館に帰る道すがら、加藤肩吾に事情をよく言い含め、余が思い立ち、年来考えつづけてきた大業をロシア人に語り伝えさせ、本気であることの証に、本邦の詳しい地図や、津軽、南部、奥羽の概要、村々の配置、山の高低、道の状況などを記した地図を、ロシアの帝王への贈り物とした。〔地北寓談207頁〕

道広の意思を聞いたロシア人たちは大いに喜び、本国の「帝王」への伝達を約束したという。

墨斎奇談のなかで左金吾は、道広がなぜこうした謀反の志を抱くにいったか、その理由を次のように分析している。松前藩は北門防備の大任を背負わされながら、同じく国境の島を治める対馬宗氏ほどの恩典に浴することもなく³⁵⁾、蝦夷地にあれば大王でありながら、五年に一度江戸へ出府すればその地位は列侯の下である。異国船が漂着し、その対応に巨額の出費があっても幕府から藩への援助はない。とりわけロシアとの対応においては経費がかさむのに、見返りは一片の感謝状だけであった³⁶⁾。こうした長年の冷遇への不満が道広を動かしたというのである〔墨斎奇談21頁〕。

最後に道広は「さて、かくも本心を明かすからには、我が汝に背くことはないと知るべし」と語り、夫に背いたとしても君主のもとへ行くのであればそれほどの非違ではなからうと言い添えた〔地北寓談208頁〕。なるほどこの大変な打ち明け話が口説き文句であったことをここでもう一度想起するのである。

よし女は夫源治と左金吾を前にして告白を次のようにつづけた。

34) 他に近藤吉左衛門、米田右衛門七、鈴木熊蔵らが派遣された。『新撰北海道史』第二巻通説一、329頁参照。

35) 対馬宗氏は朝鮮貿易の独占権を幕府から得ていた。その歴史に関して、荒木和憲『対馬宗氏の中世史』、吉川弘文館、2017年参照。山本博文『対馬藩江戸家老』、講談社学術文庫、2002年、16頁などを参照。松前藩は、その創始期の慶長9(1604)年、徳川家康からアイヌ交易独占権を付与されていたが、ロシアや中国との交易は認められていなかった。『藩史大事典』第一巻(北海道・東北編)、3頁参照。

36) アダム・ラクスマン使節への対応に関しては、松前藩は幕府から千石の報奨を賜っていた。『松前史年表』、64頁を参照。

妾も肝が潰れるほど驚き、恐れましたが、逃れるすべもないまま、緩やかに申し上げました。まことに隠侯の論したまうことによって、夢が覚めたようであります。しかしながら、卑しき妾は女の身で、夫の目の前で君に従うことはただ心に忍びないと存じます。それほどの大業を思い立たれたからには、卑しき妾をお抱えなさることなどお急ぎになってはいけません。もともと源治は他家から来て我が家を継いだ者、とにかく源治に諮った上で、隠侯に従い申し上げます。

そう申し上げますと、隠侯は、いかにも汝の申すことにも一理ある、ならば源治を密かに毒殺して病死とするのはどうか、汝がそれも忍びがたいなら、罪を着せて永遠に退かせるのはどうかと仰せられました。

妾はこれを聞き、いっそう魂が身から抜けてしまわんばかりでありましたが、その素振りは表に出さず、次のように申し上げました。この件はいかに包み隠そうとも、隠侯がおはかりになつては、側近の方々はこれをお察しになり、公の御徳が損なわれましょう。これほどの大業を思い立たれた御身でありますのに、こんな些事で御徳をお汚しになり、諸臣からも遺憾に思われることあらば、大きな害となりましょう。

千杖の堤も蟻の一穴と申します。卑しき妾はこのことを決して口外致しません。隠侯におかれましても慎重深くあらせられますよう…源治のことは妾がうまく対処し終えるまでお待ちくださいませ、そう申し上げて、何とかその場を退出することができました。〔地北寓談210-211頁〕

墨斎奇談によれば、温厚な源治に比べてよし女は気概の人で、道広の「謀反の志を阻止するためには、我が身の貞節を破り、一夜のみ隠侯のお心にしがたい、刺して心中し、禍根を断とう」とも考えたが、事後に夫や父母すべてが連座して処断されるであろうことを思うと決心がつかず、独り「涙に咽^{むせ}ぶこと度々」であったと告白を締めくくった〔墨斎奇談36-37頁〕。

道広はその後も氏家家を何度も訪れたが、家族はよし女が病に臥していると断って、面会させることはなかった。道広は苛立ちながら医師である加藤肩吾を遣わし、見舞いと称して言葉を伝えた。よし女が病に臥せるのは、「余が先に戯言^{ざれごと}として言い聞かせたことを真実とうけとり、小さな心が塞がれてしまったからではないか」、「そのことなら跡かたもなきこと（虚言）であるから、夢ゆめ気遣うことなかれ」と伝言したという〔地北寓談212頁〕。

V プロヴィデンス号来航

1796（寛政八）年9月15日（旧暦八月十四日）、ブロートン艦長指揮下の英国軍艦プロヴィ

デンス号が北海道南部の内浦湾に進入し、湾の北東、虻田沖に錨を下ろした。プロヴィデンス号をまず訪れたのは小舟に乗ったアイヌ人たちであったが、しばらくして一人の日本人がやってきた。虻田場所³⁷⁾を知行地としてもつ松前藩士酒井栄である。酒井はプロヴィデンス号に乗り込むも乗員たちと意思疎通ができず、すぐに下船、直ちに早船を仕立てて、おりしも東蝦夷地の巡見を終えて厚岸から帰還する途上にあった松前藩家老の松前左膳広政に異国船の漂着を知らせた。左膳が立てた早飛脚によって、この一報は旧暦八月十八日には松前城下に届いた。この日から、プロヴィデンス号が立ち去る旧暦九月一日（新暦10月1日）まで、松前城下は大いに揺れ動くことになる³⁸⁾。

異国船漂着の一報を聞いて藩の重臣たちはもちろん左金吾もいよいよロシア船がやってきたかと考えた。蠣崎波響は「北より赤もの（赤夷つまりロシア人）^{きたれ}来り、ことほど近きあたりなり」〔地北寓談348頁〕と左金吾に告げて、急ぎ登城していった。道広は「赤夷の船なりと心得」〔地北寓談350頁〕、すばやく行動した。できるだけ早く事態を見届けるために、まず近侍の高橋莊四郎を早馬で現地に派遣した。次いで、先年ラクスマン使節に應對した経験のある藩医加藤肩吾と工藤平右衛門、^{まい}米田右衛門七の3名を^{つうべんみとどけ}通弁見届としてその日のうちに送り出した。道広はまた松前・江差・箱館の三湊への船の出入りを止め、情報の漏出を防ごうとした。その後、徐々に重臣たちが登城してきて善後策を練りはじめ、異国船に派遣する手勢の指揮官に上席の家臣二人、松前鉄五郎と下国武を任命した。一報が届いた初日の形勢は以上のごとくであった。

5日後の旧暦八月二十三日、おそらく長万部にいた松前左膳より第2報が届いた。左膳が「異国船十七日に帰帆するかに見えたが…³⁹⁾何となく怪しい様子である。このままでは幕府への申しわけも立たず、至急人衆を差し向けられるべし」と要請してきたので、その夜、二人の君主（現藩主の章広と隠侯道広）、二庶弟（蠣崎波響と蠣崎左京）、家老たち、その他の重臣たちが一堂に会して評議がおこなわれた⁴⁰⁾。

このとき二十五日を期して諸士を派遣すること、指揮官を松前鉄五郎とし、もう一人任命さ

37) 「場所」とはアイヌ人との交易場であり、大抵は川筋の海岸部におかれた。松前藩では所領の代わりに藩士へ知行として付与された。これを松前藩特有の商場知行制という。平山裕人『アイヌ地域史資料集』、明石書店、2016年、114-115頁参照。

38) 少し煩雑ではあるが、プロヴィデンス号の行動は新暦（算用数字で記載）を、松前藩の出来事は旧暦（漢数字で記載）を優先して記述する。この節と次節の記述は、主として地北寓談「イブタの浦へ異船来る事」の節（347-365頁）にもとづく。

39) この箇所には「ヨトモ（絵鞆）の崎にて又々いかりを下し」という一文がある。日本側の史料には松前左膳広政が異国船漂着の一報を得た場所を長万部としたり絵鞆としたり、ある種の混乱がある。プロートン航海記の記述に依拠すれば、プロヴィデンス号の虻田から絵鞆への移動は新暦9月28日（旧暦八月二十七日）であり、ここの記述も先後の混乱ではないか。『プロートン北太平洋航海記』、90頁参照。

40) 地北寓談、350-351頁。

れていた下国武は後衛にあたることなどが決められた。事実上評議を主宰した隠侯道広はさらに次のように提案した。

長万部から城下までは六〜七〇里ほど、ときに獣が出没するほどの道なので、たとえ彼の地で事件が起きても、兵や馬車を急ぎ派遣し対処してなお間に合わない。中務（現藩主章広）は国を守らねばならず、一日も城を離れることができない。それゆえ隠居の身である余が諸士の指揮官となってこの地を離れ、異国船の停泊する地に馳せ参じ、肥前（松前左膳）に命令を出して臨機応変に対処したいが、各々方はどう考えるか。〔地北寓談351頁〕

家老の一人が賛意を表したあと、もう一人の家老新井田伊織^{にいだ}が反対を表明し、他者に意見を促すと、しばしの沈黙ののち蠣崎波響が「隠侯が御出馬なさるのは適當ではない」と述べて伊織に同調した。道広のなぜかの問いに波響は次のように答えた。

すでに人衆の派遣を決しているからには、一戦を交える覚悟が必要であらう。戦闘とは生き死にに関わることであり、恐れ多くも北辺の鎮護者に任ぜられている我が主君（章広）が、その身は城下に留まったまま、御隠居の身である父君を死生の地に赴かしめることにどんな理があろうか。もし敗北すれば、我が主君は後衛にいながらにして父君を辱めることとなり、勝ったとしても、鎮護者たるものが勝利を収めたのではなく、老父君が勝利を得たということを幕府に報告することなどできない。すでに士将として松前鉄五郎、下国武を派遣しており、この二人こそが諸士を指揮する任にある。もしこの両名に不足あるなら、他の人物を任命すればよい。〔地北寓談352頁〕

評議の大勢は君主の提案に異を立てた波響の論に傾いた。道広は、現藩主章広はまだ若く、これまでつねに自分が政務を助けてきたこと、この危急存亡のときにあたって親子の別にこだわって手をこまねいては日頃の鍛錬が無駄になると反論し、「いま兵法は余の好むところ、勝利はわが掌中にある」と述べて賛同を求めたが、もう一人の庶弟蠣崎左京が波響に同調するに及んで評議の大勢は決した。道広は「汝らが我が志を非とすることこそ奇怪なれ、しからば以後は何事にも我ら強いてかかわるまじ」と怒りの言葉を残して席を立ち、息子章広は畏れ入って「我が父子の間は今日よりひまを生ずべし（疎遠となるだろう）」と嘆き、重臣評議はそこで散会となった〔地北寓談353頁〕。

Ⅵ 船上の日英邂逅

工藤平右衛門、加藤肩吾、米田右衛門七、高橋莊四郎、この4人が松前藩の使者としてプロヴィデンス号を訪れたときの模様は、もちろんプロトンの航海記にも記録されているが、その記述は概して簡略である。日本側の文書にはもっと詳細な叙述がある⁴¹⁾。いまそれをひもといて、船上での日英邂逅のありさまを再現してみよう⁴²⁾。地北寓談、墨斎奇談に加えて、『北門叢書』編者の大友喜作が引証する「顛末書」⁴³⁾などをもとにする。

4人の使者たちは内浦湾岸を北上して長万部に至り、そこから虻田までの渡海を試みたが、風向き悪く苦心惨憺の末⁴⁴⁾、旧暦八月二十四日にようやく異国船の漂着した虻田に到着してプロヴィデンス号を訪れた。プロトン航海記には新暦9月25日の記述として「午前中に身なりも物腰もこれまでよりずっと立派な日本人の一行が本船をおとずれた」とある⁴⁵⁾。

虻田に到着した一行がまず眼にしたのは、プロヴィデンス号からボートで海辺に上陸し、それぞれの仕事をこなす人々の姿であった。天文家と思われる人物が何かの機材を使って太陽を観測し、画工らしき人が地面に腹這いになって湊の周囲にひろがる山河の地形を写しとっていた。樽で水汲みする水夫たちがいた。絶えず音楽が流れる⁴⁶⁾方向には全長四十間（約73メートル）ほどのいかにも精巧堅牢な船体^{みなも}が水面に浮かび、その両舷には数十門の大砲が装備してあった。猩猩^{しょうじょうひ}緋の軍服に身を包んで甲板に立つのは船将（艦長）のようである。

4人はアイヌの小舟で本船に渡り、舷側の梯子を登って甲板に立った。和船とは異なり甲板

41) 『プロトン北太平洋航海記』89-90頁。ちなみに、日本側の記述が詳しいのは、より多くの新奇に遭遇したのがどちらの側であったかを示しているように思う。

42) この叙述は主に地北寓談「イブタの浦へ異船来る事」(347-365頁)による。地北寓談のこの節は船上の様子を知るためのほとんど唯一の史料である。

43) 「顛末書」は、『北門叢書』第三冊の大友喜作による解説に引用されている文書で（同書33-37頁）、プロヴィデンス号来航直後、江戸に召喚された加藤肩吾と工藤平右衛門が幕府の久世丹後守、石川左近将監の尋問に答えたときのやりとりが記録されている。この文献は「北海紀聞」からの引用と記されているが、筆者は残念ながらこの文書のオリジナルの所在を知らない。

44) 内浦湾岸の長万部から虻田の間には静狩峠と礼文華という険阻な地形があり、現在では国道37号線で結ばれているが、江戸時代には難所として知られた。当時、陸路の開削は十分ではなく、この区間を小舟によって渡海するのが一般的であった。堀淳一『忘れられた道—北の旧道・魔道を行く』北海道新聞社、1992年、57-60頁参照。

45) 『プロトン北太平洋航海記』、89頁。新暦9月25日は旧暦八月二十四日にあたるが、顛末書には「二十五日暁にアブタへ着船」とある。この微妙なズレは単なる間違いかあるいは作為か、いずれにも考えうるが確証はない。

46) どんな音楽がどのように奏でられていたのか、大変興味深い。プロトン航海記の乗員名簿には音楽隊の名はないので、乗員らが自らの楽器で奏でたものと思われる。水夫たちの多くの出身地であったスコットランドの民謡や舞曲などが想像されるが、別の機会に何らかの手がかりを得たいと考えている。

はすき間なく板張りされ、どんな大波でも海水の入り込む余地はないように見えた。甲板の「中ほどに三尺四方ばかりなる天窓あり」と記すのは船内へ通じるハッチである。彼らはハッチを通して船内に入り、銃剣を捧げ持つ兵列が両側に控える間を左右に曲がりながら進んで艦長室に至った。その入り口には旗が下がり、左右に衛士が屹立する。

室内に入るとさまざまな椅子が並べてあった。各々それに座ると、一段高いところにいた船将がおもむろに立ち上がり、近くに寄り来たって椅子に座った。その隣に天文官、医師、画工などが席についた⁴⁷⁾。席が定まって船将が小さな笛を吹くと、4人の四囲に控えていた武装兵士たちがすべて退出し、いよいよ対話が始められようとしたが、身振り手振りで意思を伝えるも一向に通じそうもなく、そこで加藤肩吾がかねて身につけていたロシア語を発してみると微かに通じる気配であった。船将はただちにロシア語の分かる水夫を一人呼び出し、この男を介して対話が始められたのである。

加藤肩吾がまずどこの国の船で、これからどこに向かうのかと問うと、船将はすぐに傍らの柱の横木をひねった。すると、上から一葉の地図がするすると降りてきた。船将はこの地図を指差して故国を示した。その名をアンゲリヤという。アンゲリヤとはイングランドを意味するラテン語 (Anglia) であるが、ロシア語にも同じ語 (Англия) がある。イギリス側の史料では加藤らがヨーロッパ諸国の紋章が肉筆で書き込まれた本を持参し、そのなかからイングランドの紋章を指差して確認したとある⁴⁸⁾。

船将はそれから地図上の広東を指差し、さらに長崎、そしていま停泊している松前夷地を指差した⁴⁹⁾。加藤らはこうした所作とその間の対話から次のような航跡を読みとった。「広東へ商売に行こうとして、今年の四月アンゲリヤを出帆、南アメリカのハラシリヤ (ブラジル) へ寄航、そこからノーウワゴウランデヤ (ニューホランドのロシア語ノーヴァヤ・ゴランディア、オーストラリアの旧称) を回り、次に北アメリカのエリホウリニヤ (カリフォルニア) へ、そして広東を目指していたところ、日本南海で大嵐に遭遇して薪水も欠乏し、ついにこの地に漂着した。」これが「顛末書」で加藤らが幕府におこなった説明である⁵⁰⁾。

地北寓談にも墨斎奇談にも共通するこの説明はプロヴィデンス号の実際の航跡とはある程度一致しているが、航海の目的とは合致しない。プロヴィデンス号は商船ではなく、紛うことな

47) 天文官はジョン・クロスリー、医師はジョン・フラウドであるが、プロヴィデンス号乗員名簿には画工という記述はない。この画工とは、ときに海図の作成などを担当した三等海尉ジェームス・G・ヴァンションかと思われる。『プロートン北太平洋航海記』、9 頁以下のプロヴィデンス号乗員名簿を参照。

48) *William Robert Broughton's Voyage of Discovery to the North Pacific 1795-98*, London, 2010, p. 77 及び『プロートン北太平洋航海記』、91 頁を参照。

49) 地北寓談、362 頁。

50) 地北寓談解説、35-36 頁。

き英国海軍の軍艦であり、日本近海への遠征には地理的探査という明確な任務があった。この落差は何を意味するのか。

ブロートン航海記をつぶさに読んだ者には、ブロートンらが自身の航海を広東への商売の旅と説明したとはなかなか信じがたい。英国軍艦であるプロヴィデンス号には異国・異境を訪れる際に準拠すべき海軍条例という行動規範があった⁵¹⁾。上陸地が近づいてくると乗員を呼集し海軍条例を読み聞かせ、士官や海兵は軍服を着用、正装して上陸に備えた。ここで描写されるプロヴィデンス号船内の様子もそうした規範に則っていたかに見える。左金吾の描写は具体的で詳しく、そして新奇性が豊かであり、道広への報告者の加藤肩吾か、あるいは左金吾自身が創作したものとはとても思われぬ。つまり船上での体験が間違いなく本物であるならば、それを体験した加藤らがこの軍艦を商船と見誤るのはかなり不自然なことと言わざるをえない。

これは、言語の不通に起因する結果かといえば、おそらくそうではなかろう。「顛末書」にはさらに次の記述がある。後日、江戸にて加藤らを事情聴取した久世丹後守が「兵船の様子はこれ無きや、武器等は沢山に積みおりそうろうや」と尋ねると、加藤肩吾が「まったく兵船とは相見え申さず、度々カントンへ商売に参りそうろう様子にて、カントンの男女の衣服にて…」と答えた。それから「石火矢（大砲）二十挺ばかり⁵²⁾」を備えていたが、ヨーロッパ船ならどんな船にもある程度の武装だと付け加えた。こうした説明を久世丹後守らは疑問を持たず受け入れたのである⁵³⁾。加藤肩吾はプロヴィデンス号男女の姿を絵に残しているが、こうした説明とは裏腹に、男も女も中国風ではなく、紛れもなくヨーロッパの服装をしている⁵⁴⁾。

51) 『ブロートン北太平洋航海記』198頁と199頁の訳註46、さらに小林幸雄『図説イングランド海軍の歴史』、原書房、2016年の第一部を参照。

52) 実際にプロヴィデンス号が装備していた大砲は16門であった。『ブロートン北太平洋航海記』、8頁参照。

53) 地北寓談解説、36頁。この箇所は編者大友喜作の解説の部分にあたり、そこにこの顛末書が引用されている。

54) この絵は福居芳麿「蝦夷の嶋踏」（板坂耀子編『近世紀行文集』第一巻、葦書房、2002年所収）に収められている。国会図書館デジタルコレクションにそのデータが公開されており、『ブロートン北太平洋航海記』の口絵としても転載した。



福居芳麿「蝦夷の嶋踏」の絵図。プロヴィデンス号乗員の2人を描いたこの絵は、加藤肩吾の絵を写しとって転載されたもの。男女とも西洋風の服装をしている。国会図書館デジタルコレクションより（原本はカラー）。絵図中の説明文は「寛政八年^{ひのえだつ}丙辰秋八月十四日東蝦夷地アブタへ漂着 アングリア人男女の図」

ここにはプロヴィデンス号来航をできるだけ穏便な出来事として江戸幕府に報告しようとする松前藩側の意図が働いているように思う。道広が命じて編纂させた松前藩史「福山秘府」は、プロヴィデンス号のこの年の来航を「漢人（中国人）がイギリス大船で東部虻田の海口に至る」と記す⁵⁵⁾。プロヴィデンス号は翌年にも絵鞆に寄航したが、これを幕府へ報告した松前若狭守（章広）は、「アンゲリア國船」は「支那カントンへ商いに参」る途上で「水木（薪水）切れ」のために蝦夷地に立ち寄ったものと届け出た⁵⁶⁾。これらはいずれも加藤らの幕府への答弁と軌を一にした記述であると思う。

松前藩の振る舞いには対幕府マヌーバーが随所に見え隠れし、また、幕府の側も、少なくとも寛政八年の最初の来航時にはあまり事態を深刻に見ておらず、ことを穏便に済まそうという姿勢においては松前藩と選ぶところがなかったように感じる⁵⁷⁾。翌年再びプロヴィデンス号が

55) 「福山秘府」（『新撰北海道史』第五巻史料一、復刻版、1992年）、80頁。

56) 「通航一覧」巻二五四（『通航一覧』六、国書刊行会、1913年）、368頁。

57) 「顛末書」にはさらに次のやりとりがある。江戸での事情聴取において、プロヴィデンス号乗員が絵鞆の入江に「上陸し、薪水取り入れ候」と久世丹後守が記録しようとしたとき、加藤肩吾は、「上陸とござ候ては、恐れながら小屋にてもしつらえ」たようにも聞こえるが、「まったく左様には御座なく候」、無人の海岸に上陸しただけであると異議を唱え、丹後守はそれを受け入れてあっさりと上陸の二文字を削除した（地北寓談解説、36頁）。

絵鞆に来航するに及んで、幕府の認識は大きく改められることになる。

さて、船内の様子に戻ろう。艦長室のガラス窓越しに船内を見渡すことができた。室内の壁には大小の鉄砲が架け並べられ、船室中央に置かれた卓中には鉛玉、鉄玉が敷き詰められ、そのほかにも板壁のうらにたくさんの鉛玉が収納されていた。「さて人物は蘭人（オランダ人）のごとく、赤夷（ロシア人）のごとく、婦人とおぼしきもの一人まじりて万事を主宰し、（松前藩の）諸士の手を引きて舟中を一見せしむ⁵⁸⁾」とある。階段を降りて船底に向かうと、そこはいく段にも分かれ、豚、鶏、羊などがたくさん飼育されていた。もてなしの食べ物は大唐米（赤米）、琉球芋（さつまいも）など南国の産物が多く、ロシア船には見えなかったという⁵⁹⁾。

9月26日（旧暦八月二十五日）、加藤肩吾らがふたたびプロヴィデンス号を訪れた。プロートンが日本の友人たちを晩餐に招いたからである。このとき加藤らは日本製の地図をプロートンに模写させ、プロートンはキャプテン・クックの航跡が書き込まれた世界地図を返礼とした。プロートンの航海記には「友人たちは好奇心旺盛で、見るものすべてに感想を述べ、理解できないものはすぐにそれを墨でスケッチした」とある⁶⁰⁾。松前藩士たちは国禁を犯して地図を交換した。それゆえであろうか、この二度目の乗船について顛末書ではまったく言及されず、地北寓談、墨斎奇談にも言及はない。

最後に加藤らはプロートンと帰帆の期日についてのやりとりをした。プロートンが薪水の調達を完了すれば立ち去るというので、加藤が片手を開き帆の形にして「風ニ吹き去ルゴトクロニテフウト云テ示ス」、これは「五日ばかり在リテ去ルベシヤ」という意味で、プロートンは両手を開いて帆の形とし、同じ仕草をしてうなずいた。これは十日を意味したが、実際、プロヴィデンス号の虻田と絵鞆での錨泊は十日を数日超える程度であった⁶¹⁾。

9月28日（旧暦八月二十七日）、松前藩士たちとの会談を終えて、プロヴィデンス号は虻田沖から絵鞆沖へと移動した。三日前、ボートで先発した航海長ウィリアム・チャプマンがそこに「すばらしい湊」（白鳥湾、現在の室蘭港）を発見していたからである。プロヴィデンス号は内浦湾岸に沿って南東へ約30キロメートル航行して、湊の沖合に錨を下ろした。船の移動に遅れて加藤らも絵鞆へ移動し、異国船見きわめの任務をつづけたが、絵鞆では浜辺に座したまま、異国人とそれを眺めるアイヌ人らの動きを監視するのみで、船に乗り込むことはな

58) この婦人について、墨斎奇談 15-16 頁に「二十四、五歳ニミユ、甚ダ怜悯」、「小船頭ノ婦ナリ」と書かれている。

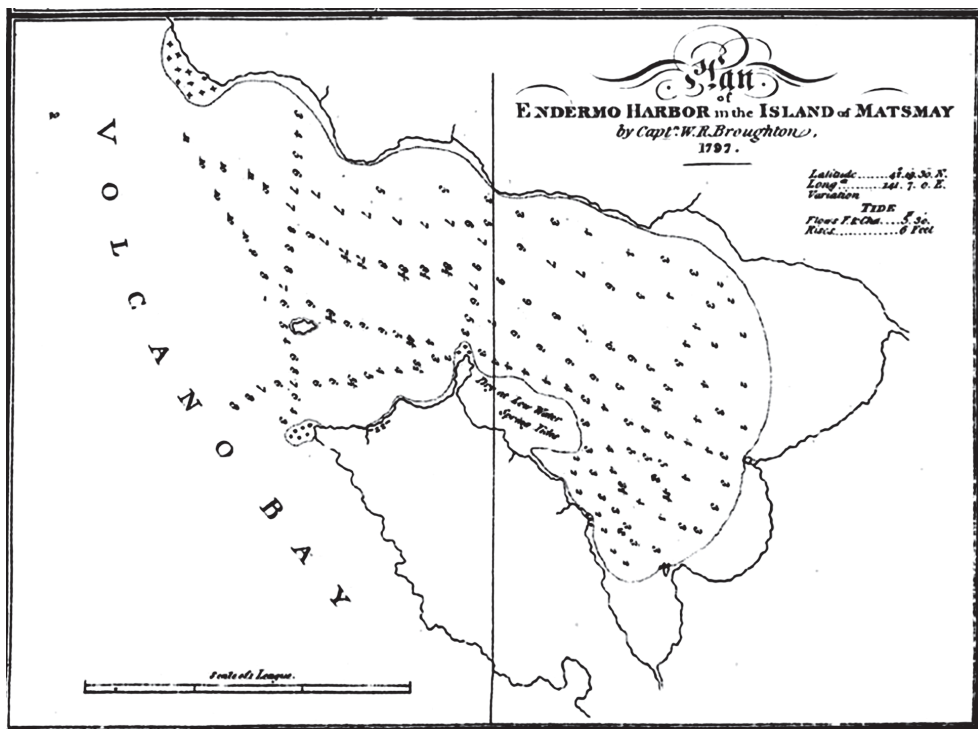
59) 地北寓談、362-363 頁。南国のものが多かったのは、蝦夷地に来航する前の最後の寄航地がハワイ諸島であり、そこで食糧調達をしたためである。『プロートン北太平洋航海記』解説の「Ⅲ ハワイ諸島、そして太平洋横断」の節参照。

60) 『プロートン北太平洋航海記』、90 頁。

61) このやりとりは墨斎奇談（15 頁）にのみ記されている。

かった⁶²⁾。

絵鞆沖に錨を下ろしたプロートンは、水夫たちを上陸させて薪水の調達をおこなうとともに、ボートを出して湊の詳しい水深調査をおこなった。9月30日、薪の補充のために樹木の伐採作業をしていたデンマーク出身の水夫ハンス・オルソンが倒木の下敷きになって落命し、湊口に浮かぶ小島に埋葬された。プロートンはこの小島をオルソン島と名づけた⁶³⁾。浜辺に陣取ってプロヴィデンス号の監視をつづけていた松前藩士たちがこの出来事を見落としたとは想像しにくい、日本側のいずれの文書にもそのことへの言及はない。



プロートン作成、絵鞆の入江（現室蘭港）の海図。図中には数字で水深が書き込まれている。湊口に浮かぶ小島がプロートン命名のオルソン島、つまり大黒島である。W.R.Broughton, *A Voyage of Discovery to the North Pacific Ocean*, p.96

62) 地北寓談解説, 36 頁。

63) 『プロートン北太平洋航海記』, 91-92 頁。小島は周囲およそ 700 メートルの大黒島。1854 年にペリー艦隊が日本を再訪した際、艦隊の一隻サウサンプトン号がプロートン作成の海図を手がかりに絵鞆湊を訪れ、艦長ボイル大尉が大黒島に上陸してオルソンの墓を発見したが、そこで見たのは日本人が建てた墓標であったという。ペリーの日本遠征記には「その遺骸は四分の三世紀以上の間空しく埋れてをつたのではあるけれども、日本の役人たちはそれを鄭重に取り扱ってゐてくれた」と書かれている。土屋喬雄・玉城肇訳『ペリリ提督日本遠征記（四）』, 岩波文庫, 1955 年, 151-152 頁参照。

Ⅶ 出陣

ここで少し時間をさかのぼる。寛政八（1796）年旧暦八月二十三日の重臣評議で道広の出陣の意志はいったん挫かれたかに見えた。だが隠侯道広はあきらめず、堂奥から巻き返しを試みた。重臣たちを一人ずつ呼び寄せ、まず、あとき露わにした怒りの弁明からはじめた。

さてこの度、余が彼の地へ赴こうとするのを重臣たちや二庶弟、汝らまでが押しとどめようとするのは、主君を思うゆえであろうから、表面は怒って見せても、心中は満足している〔地北寓談353-354頁〕

道広の弁明はつづく。

とはいえ汝らは、ただ勞わり思うのみで、余の真意を理解していない。そもそもこの度派遣する家士たちは血氣盛んな若者ばかりで、ことを起こしたいと念じるさまである。異国船に怪しい挙動があったときにはそれを打ち取るべし、それが幕府の命令であっても、ただ薪水を求める異国船を敵とみなせば、みずから仇を求めることになる。それゆえ、我らの家士たちも損なわずに、とにかく（異国船を）帰帆させるのが一番よい。余が彼の地へ赴くというのも、長万部まで行こうというのではない。たとえば鷹狩と称して道半ばまで進み、そこで命令を伝えようというのだ。この意図をよく汲んでもらいたい〔地北寓談354頁〕

この反転攻勢はあっさりと成功した。話を聞かされた誰しもが「ありがたき御思召し」と受け止めたという。ならば最初から議論しておけばよさそうなものだが、君主の君臨する武家社会のこと、衆議の結論を反故にしても、それが君侯の意向ならば誰もがさほど理不尽とは考えなかった。道広の老練なレトリックが各個撃破か、いずれにしろこの巻き返しは奏功し、道広は旧暦八月二十五日⁶⁴⁾、手勢280名を率いて、松前城下から東北東に直線距離で約70キロメー

64)『松前町史』通説編第一巻下（1988年）、92頁や『新撰北海道史』第二巻通説一、336頁では二十一日となっている。少なくともプロヴィデンス号の動向に関して言えば、『新撰北海道史』にはプロートンの航海記や地北寓談と合致しない日付が散見される。どちらが正しいかは保留するが、ここでは航海記と地北寓談の日付にしたがう。

トルにある亀田に向けて出陣することになる。名目は鷹狩りであった⁶⁵⁾。

亀田へ向かう途上、旧暦八月二十六日、道広は見送りとして途中まで随行していた蠣崎左京に、ことの次第を幕府へ報告するように命じた。ただし、異国船漂着の知らせを八月十八日に受けてからすでに八日、この日によりやく人衆を差し向けたとあっては幕府に怠慢とも取られかねないから、道広の出馬は数日前のこととして、異国船の状況が知れないのでまずは海岸防備に努めると報告するように命じ、左京もそれを了解して城下へ戻っていった。

この日、亀田に急ぐ道広は現地から早馬で帰ってきた高橋莊四郎に出会う。莊四郎はすでに虻田に赴き、加藤らとともにプロヴィデンス号に乗船し、異国船見届けの任をつづける加藤らを現地に残して帰還したところであり、差し迫った任務は一刻も早く異国船事情を松前城下にもたらすことであった。だが道広は莊四郎に亀田へ同行することを、つまり引き返すことを命じた。幕府に報告するにあたって、左京への指示とは反対に、莊四郎には八月二十五日まで長万部で風待ちをしていたことにするよう命じた。いずれにしろ道広の一行が亀田に到着し、そこに陣を敷いたのはようやく八月二十七日のことであった⁶⁶⁾。

道広が左京に命じた幕府への報告書は八月二十五日付で作成されて城下の留守居役から発信された。通航一覧には同種の届出文書が何通も収められているが、発信元は松前若狭守、つまり藩主章広である。ただし、通航一覧にはこのときの届出書は収められていない⁶⁷⁾。地北寓談によれば、道広の命にしたがってこの文書には、二十五日より数日前に人衆を送り出したが、異国船の状況はいまだ確認できずと記されたようである。それゆえに莊四郎の行動はいまだ異国船への往來を果たしていないものとして記録される必要があった。莊四郎への道広の命令はそのような意味であろう。

この届出文書は、松前表から江戸へ送られるとともに、その草稿が亀田の道広にも示された。そこには「異国船手当二十五日まで怠りしはおしつづむべし」という観点から、「とくより（早くに）彼の地（長万部）に人をさしこし、二十五日までの談はかくのごときなりし由」と記されていた。このとき道広に侍坐していた高橋又右衛門が「彼の地」の出来事を八月二十五日分まで記載した文書が、松前表から二十五日の日付で発信されたのは、「彼の地」から松前までの旅程を考慮すればおかしいことと幕府に咎められまいかと指摘し、道広を大いに狼狽させた

65) この節の叙述も基本的には地北寓談「イブタの浦に異船來る事」の節（347-365 頁）に基づく。また、『松前町史』通説編第一巻下、92 頁参照。亀田は現在は函館市内にあるが、現場である虻田や絵鞆から海を跨いで、直線距離で 70 キロメートル以上隔たっている。その間の交通は、亀田から北へ 40 キロメートル弱程にある内浦湾岸の小湊、砂原から絵鞆へ渡海するか、陸路でさらに遠くの長万部まで進み、そこから虻田へ渡海するかのどちらかであった。

66) 地北寓談、359-360 頁。

67) 「通航一覧」巻之二五四、365-369 頁。

という⁶⁸⁾。

幕府や、蝦夷地の内情を探ろうとする人士に対する松前藩のこうした一種の秘密主義はしばしば指摘されるところでもある⁶⁹⁾。天明年間に松前を旅した古川古松軒が江差で宿の亭主に周辺の地理・風俗を尋ねたとき、古松軒は「領主・役人より堅く口留めあるような口ぶり」を感じたと、その「東遊雜記」に記す⁷⁰⁾。この人は幕府巡見使の一員であったから、当然警戒されるべき旅人だったのである。

明治四十五年に論文「松前氏露国密謀誣説の補遺」を発表した加藤扶桑（房蔵）は、林子平、最上徳内、そしてかの松浦武四郎も松前藩の憎悪の対象となり、「徳内が松前人のために毒殺せられざりしは実に僥倖なり」とか、武四郎も「憎まれ役の筆頭」で、「辛うじて毒死を免れし一人なり」など書き記した。ちなみに大原左金吾も、少し事情は異なるが、同様に憎悪の対象であったと書き添えている⁷¹⁾。

さて、寛政八年に話を戻そう。工藤平右衛門、加藤肩吾、米田右衛門七、この3名は現地から亀田まで帰還し、そこで道広に異国船事情を詳しく報告した。道広は異国船がロシア船ではなくイギリス船であることを悟った。そしてイギリス船が絵鞆を出帆したことを知った道広は、亀田の陣を引き払うことにした。この報告がおこなわれた日付は地北寓談には書かれていない。顛末書によれば、旧暦八月二十九日七ツ時（午後四時）、絵鞆湊にいた加藤らは異国船が西風に乗って出帆するのを見届けた⁷²⁾。この日は新暦9月30日で、水夫オルソンが湊口の小島に埋葬された日である。したがって、彼らが亀田に戻ったのは早くとも旧暦九月一日以降、必要な旅程を考えれば実際にはそれよりさらに数日後ということになる。推定されるその日付は、道広が実際に旧暦九月四日に亀田の陣を払ったことと符合しているように思う⁷³⁾。

こうした一連の出来事を左金吾はどう見たのか、先に述べた、プロヴィデンス号来航事件を道広のロシア内通疑惑の文脈で解釈したとはどういうことか、この節の最後にその点を補足し

68) 届出はすでに送られた後だったので、道広は高橋又右衛門を急ぎ城下に走らせ、城下に留まっていた家老らに善後策を託した。蠣崎波響は、この国は海国であり、いざとなれば船を使って「彼の地」からその日のうちに帰還できるという弁明が可能だと述べ、一同を安堵させたという。地北寓談、364頁。

69) 例えば渡辺京二『黒船前夜—ロシア・アイヌ・日本の三国志』（洋泉社、2010年）の第四章に、とりわけ幕府に対する松前藩の秘密主義が論じられている。

70) 古川古松軒『東遊雜記』、135頁。

71) 加藤扶桑「松前氏露国密謀誣説の補遺」、『世界』第96号、1912年5月、62-63頁。加藤扶桑及びその論文について、詳しくは註101を見よ。

72) 地北寓談解説、37頁。

73) 地北寓談、364頁に道広が「二十七日に異船帰帆の談を聞き及ばれ」とあるが、顛末書やプロトンの航海記に照らして二十七日の帰帆はありえず、また、二十七日以前の帰帆を二十七日に聞いたと理解しても辻褄が合わず、おそらく日付の間違いであろう。

ておきたい。

蠣崎波響の邸で道広の出馬を知り、かつ加藤肩吾がすでに現地へ派遣されたことを知った左金吾は、他の多くの人々と同様、異国船がロシアの船であると誤信した。もともと加藤肩吾をも疑惑の眼で見ていた左金吾は、隠侯の命を受けた加藤肩吾が、藩の重臣たちに知られぬまま、秘密裏にロシア側との交渉を進めるかもしれぬと疑い、それを阻止するために自分も道広の出馬に同行しようと思立った。左金吾は城中にいる波響に手紙をしたためて同行への後押しを求めた⁷⁴⁾。

隠侯が彼の地へ御出馬することを聞き及びました。…小生思うに、隠侯は日頃から奇をお好みになりがちで、この度も自然と鉄砲などを撃ちかけ、戦闘におよぶこともありそうと拝察いたします。重臣の方々もご随行なさるとのこと、ご諫言に拔かりなきものとはいえ、小生はいつも隠侯のご内談に預かり、…隠し事なき間柄、この度お供できれば、和して同ぜずの立場から適切に諫言し、故なき事件を起こさぬ所存でございます。小生は先頃お暇を乞うたばかりながら、今般のことでは少しも後に引くつもりなく、ひとかたお役に立ちたい所存、この旨よろしくご披露下されたく、お願い申し上げます。〔地北寓談355頁〕

この文面ではロシア内通疑惑について一言もふれられていない。波響はもちろん、そのほかの重臣たちもそのような疑惑を共有するものではなかったから、表向き道広の行き過ぎた尚武の気風を警戒する趣となっているが、これならばときに道広の勇み足をたしなめてきた波響らの賛同を得られるのではという読みが左金吾にはあった。蠣崎波響は手紙を見て直ちに邸に戻り、左金吾に、「ご深情かたじけなくこそ存じ候」、とはいえ「若輩の血気を抑えん」という「大炊介殿のお考えもさほど奇異とは思われず」、「先生のお越しにはおよばず」〔地北寓談356頁〕といった意向を伝え、結局、左金吾の同行は実現しなかった。

イギリス船が去って陣払いの決まったころ、道広は亀田の陣中で「天に北斗地に我れありや秋の風」と詠んだ⁷⁵⁾。事態が収拾され、ほっとした気持ちを詠んだとすれば曲のない一句に聞こえるが、左金吾の眼には大業の挫折を悼む道広の失意の句と映ったのかもしれない。道広が松前城下に戻ったころ、前線を取り仕切っていた松前左膳広政や手勢を率いた松前鉄五郎らも追い追い帰還し、国中によりやく安堵の空気が流れた。

74) 地北寓談、355-356 頁。

75) 地北寓談、365 頁。

VII 告別のとき

左金吾の波響宛書簡に「小生先頃お暇を乞うたばかりながら」とあるのは、約束の一年がすでに経過し、本来なら帰還すべき時が来ていたからである。すでに寛政八年七月はじめにも左金吾は波響を介して、所定の期日をもって帰国したいと申し入れていたが、道広は使者をよこして慰留の意思を伝え、その許しはなかなか下りなかった⁷⁶⁾。そうして左金吾の松前滞在は一年を超え、その間に異国船来航事件が^{しゅったい}出来し、いったんは帰国の願いを返上して、「今般のことでは少しも後に引くつもりなく、ひとかたお役に立ちたい所存」と決意を披瀝することとなった。プロヴィデンス号が大洋の彼方に消え、左金吾独り松前の地に取り残されたいま、帰国のことがふたび念頭に来るのは自然のなりゆきであった。

道広のロシア内通疑惑を胸中に抱えながら、左金吾はその確証を探し求めてきたが、確たるものは何も出なかった。道広が折おりに左金吾の帰国を留めようとすることは気掛かりな事実ではあった。異国船が去った九月以降、道広は3通の手紙を左金吾に宛て、最初の手紙では「日増しに寒さも厳しくなるこの頃、少しでも病があれば旅行は良くない。よくよく考えて来年の春まで留まってはどうか」〔地北寓談375頁〕と伝えてきたが、左金吾がそれを固辞すると、第二と第三の手紙では「いかに留めても留まるまじくは力なし」〔380頁〕と述べてようやく左金吾の帰国を認めた。

左金吾の心に残る問題は告別の儀をどうするかであった。松前を辞去するにあたり、二人の君主よりさまざまな贈り物が届けられた。帰国の直前には登城し、二主に辞去の挨拶をする儀式が必要であったが、「もし告別の儀に及びし時、饞筵（送別の宴）に事よせ毒酒を盛られる」かもしれないと恐れを抱いたという〔373-374頁〕。この話は左金吾の被害妄想か、荒唐無稽として一蹴することもできる。ただそうした恐れをかもしれない状況があったことにはふれておきたい。

プロヴィデンス号来航のとき、左金吾の朋友でよし女の夫氏家源治は、松前鉄五郎の指揮下、手勢の一員として長万部に出陣した。松前に戻ってしばらくすると、藩主章広に召し出され、三か条の罪で君主の誹りをこうむった。その一つは長万部から帰還した直後、亀田における道広の陣立の批判を左金吾に漏らしたことであったが、その罪状にはのちに「左金吾と異国人のことを語り合ったこと」が付け加えられた。「汝がごときは物の用に立たない」〔373頁〕とは源治に向けられた章広の言葉だという。これが君主の口に発したとすればなかなかの厳しさで

76) 地北寓談には、左金吾引き留めの理由として「和流兵学の儀は一通り相済みそうらえども、…もすし愚息などへも文学（儒学）を教授下されるよう」などと記され（331頁）、この頃の両者の関係が「大炊介殿もとどむるでだてつきて、其後は招きもせず、ゆるしもせず、其ままにて日をおくりけるとなり」（347頁）と、膠着した状況が描かれている。

あり、源治は閉居するか、「致仕して妻をも離縁せしめ、実家に戻り、一生日陰の身たるべし」という苦境に立たされた〔373頁〕。実際に源治は閉居謹慎を余儀なくされた⁷⁷⁾。

左金吾は毒殺を恐れ、明治四十五年に松前藩を論じた論文の著者加藤扶桑も毒殺に言及した⁷⁸⁾。18世紀末の松前藩とはそうした陰謀渦巻く世界であったかといえ、必ずしもそうではなかろう。まさしくこの時期に松前を訪れた平秩東作や古川古松軒の紀行文には自由で活気に溢れ、身分制秩序の緩い、日本本土とは少し異質な社会が驚きをもって描かれている⁷⁹⁾。彼らの驚きはおそらく根拠あるものだったと思う。ただしそれは、人々の暮らしや産業、文化、風俗など、社会生活全体を見渡した場合の話である。

松前で暮らす寛政年間の和人地内の人口2万7000人強のうち、家臣団は350人ほどを数えるにすぎなかったが⁸⁰⁾、この小さな武家社会ではかなり様相が異なっていた。少なくともそう思わせる記述がある。

平秩東作の「東遊記」には、松前の旧友、村上弥惣兵衛が語る藩の悪政譚が拾われている。話は近年なぜかニシンの群衆が減ったことから始まる。弥惣兵衛は「国に奸佞^{かんねい}の者ありて主君を惑はし奉る故、近頃忠良の臣は退けられ、又は罪を得て国を去りたるものあり。その冤恨つもりて漁なきなり」と嘆く。告発はさらにつづき、「この陪臣何某といふ者、おのれが主人の無実^{むじつ}に沈るをなげき、さまざま艱難^{かんなん}を歴て志をはこびけるを、くせ事なりとて牢に入れ、さまざま呵責せられけるによりて、つゐに獄中に死たり」と述べる。これにつづいて、東作の友で「廉潔の士」、文才にも恵まれたある藩士が「罪の有無をもたさず、今に牢内にありて苦めり」、「其の餘非命に死たるもの多し」と書かれている⁸¹⁾。狭小な武家社会の内側においてこうした苛政が実際におこなわれていたとすれば、左金吾の恐れも杞憂とばかりはいえなかったのであ

77) 地北寓談解説, 38 頁。解説には、波響邸に同居していた波響の義弟による讒言がきっかけであったと説明されている。

78) 加藤が毒殺に言及したのはおそらく、第三代藩主氏広から第五代藩主矩広までの約百年間(1623~1720 年)に、松前藩において「藩主一門間の権力争いが激化し、家老の変死事件が相ついで生じる」という陰謀の時代があったことを知っていたからであろう。『藩史大事典』第一巻(北海道・東北編), 4 頁参照。

79) 中村真一郎は『蠣崎波響の生涯』第九章で「東遊雑記」を論じ、この紀行文がかなり楽観的で必ずしも蝦夷地の実情を正確に捉えていないと示唆し、古松軒が幕府巡見使の一員であったから、松前藩は不都合な現実を目隠しをしたと推測する。しかしその推測の根拠は示されていない。筆者には、学者としての一種のバランス感覚に依拠した推測のように感じられる。

80) 寛政十(1798)年の「松前藩中及扶持人列席調」では、諸士 229 名、足軽 96 名、地侍 24 名で、藩士の総計 349 名と記されている。『松前町史』史料編第一巻, 463 頁参照。また、『藩史大事典』, 第一巻, 5, 6 頁参照。

81) 平秩東作「東遊記」, 425 頁。

う⁸²⁾。

左金吾は結局病の悪化を理由に告別の儀を免れ、寛政八年十月十日順風を得て慌ただしく渡海して津軽領三厩へと脱出した。その後水戸藩に入り、地北寓談を書き上げた経緯はすでに述べた。森銑三の研究によれば、その後左金吾は幕命で水戸藩主の子である中山備前守信敬に預けられ、水戸藩から扶持を賜り、しばらくは江戸で暮らしたのち、京都に戻って静かな晩年を過ごし、文化七（1810）年五月に没した。享年四十九歳であった⁸³⁾。

Ⅸ 英国船再来

左金吾が松前を去った翌年の寛政九年七月（1797年新暦8月）、プロトン探検隊がふたたび蝦夷地は絵鞆の入江にやって来た。このときの来航の目的は、前年の来航のときにやり残した任務を遂行すること、すなわち津軽海峡を西に抜けて蝦夷地西岸沿いを北上し、当時ヨーロッパではほとんど知られていなかったユーラシア大陸の東の涯^{はて}を見極めることであった。このときの来航の様子はプロトンの航海記と江戸幕府の記録文書「通航一覧」、さらには最上徳内「蝦夷草紙後篇」に印象的な筆致で記録されている。

絵鞆の入江に到着したプロトンはすぐに乗員を上陸させ、薪水の補充、鍛冶仕事を命じた。このたびも女が一人乗り組んでいて、上陸し洗濯をする様子が見えた。乗員の誰かが一人のアイヌ人に「加藤肩吾は恙^{つつがな}きや」と尋ねたという。松前藩主章広は加藤肩吾、工藤平右衛門らを応対の使者として派遣したが、船上にロシア人水夫が一人あり、加藤がやって来るのを見て大喜びしたと伝える⁸⁴⁾。プロトンの航海記に新暦八月十八日「われわれの古い友人たちがやって来た」とあるのは、このときの加藤らの来訪のことである。加藤らはプロトンが「こんな

82) 『藩史大事典』第一巻（北海道・東北編）、4頁参照。この箇所には、17世紀のことではあるが、「藩主一門間の権力争いが激化し、家老の変死事件が相次い」だ松前藩の内情が書かれている。

83) 森銑三「大原左金吾」、500頁、515頁、菊池喜一「大原歴史散歩」、91頁など参照。

84) 「通航一覧」巻之二五四、365頁、また、最上徳内「蝦夷草紙後篇」（『北門叢書』第三冊所収）の「異國舟エトモへ再度来る事」（454-456頁）を参照。

小さな船で来たのにとっても驚き⁸⁵⁾、また、ふたたび来航したことに当惑している様子であった」と、航海記には記されている。松前藩士たちの態度は昨年と異なっていくぶんか監視的であったと言いながら、プロートンは加藤らから日本の島々のすぐれた地図をもらい、そのことを堅く口止めされた。彼らはプロートンに蝦夷地の地名や町の様子を教え、「マツマイの北東にある湊ハコダテにロシア人たちが商いにやってくる」と語った⁸⁶⁾。

当時ロシア人がどれほど松前に浸透していたか、箱館に商いにやってくるという証言は事実だったのか、こうした問いは検証に値すると思う。少なくとも奥蝦夷のアイヌ人のあいだにはロシア風の帽子や外套が広がっていたという⁸⁷⁾。地北寓談には旧暦七月の松前城下の祭りでロシア風の服装をまとった松前の男女が「三絃太鼓を以って終宵歌舞する」とか、藩主章広が「赤夷（ロシア人）のごとき衣服を着し、…野外へ出られける」といった記述がある⁸⁸⁾。こうした記述もまた裏付けや傍証を探るべき事象だといえよう⁸⁹⁾。

英国船2年続きの来航は北辺の情勢を一変させた。松前藩は下国武を指揮官、新谷新六左衛門を副官として300名ほどの手勢を絵鞆に向けて出動させた。このたびははっきりと異国船打ち取りがその目的であった。手勢は松前を出て内浦湾に面した小湊、佐原に到着し、対岸の絵鞆への渡海を準備したが、その準備の完了する前になぜかイギリス船は抜錨し出帆していった。蝦夷草紙後篇には「不思議なるかな俄に碇を取り上げ帆を巻きて、浜辺に一人残り居たる異国人は捨置いて乗り出す」とある⁹⁰⁾。通航一覧には、取り残されたのが山中で木の伐採に従事していた水夫の一人で、浜辺で泣き叫ぶさまを不憫に思い、加藤肩吾が「蝦夷船（アイヌの小舟）

85) 前年の来航から二度目の来航までのあいだに、プロヴィデンス号は琉球の宮古島海域で座礁して失われ、補助艦であった小型のスクナー船で再度の蝦夷地探検が続行された。スクナー船の乗員は出発時35名、その後事故で1人欠けて34名となったが、前年のプロヴィデンス号には110名ほどが乗り組んでいた。親船プロヴィデンス号が積載量400トン強とあるから、87トンのスクナー船（この船のちにプロヴィデンス号と命名された）は五分の一ほどの大きさであった。『プロートン北太平洋航海記』「解説」の「Ⅵ 座礁」および「Ⅶ ふたたび蝦夷地へ」、「解説」の註49、さらに Andrew C.F.David, Broughton's Schooner and Bounty Mutineers, *Mariners Mirror: Journal of the Society for Nautical Research*, Vol.63, 1977 参照。日本側の史料にもスクナー船「全長十三尋」（20メートル強）と記されている。福居芳麿「蝦夷の嶋踏」（板坂耀子編『近世紀行文集』第一巻蝦夷編），159頁。

86) 『プロートン北太平洋航海記』，201-204頁。

87) 中村真一郎『蠣崎波響の生涯』，84頁参照。

88) 地北寓談，331-332頁。道広も「園中などを逍遙するに赤夷の旅服を被りて快しとす」とある。

89) 片山杜秀『尊王攘夷—水戸学の四百年』，新潮社，2021年の第四章の二（「水戸学の蝦夷地探検」及び「ロシアについて」の節，237-254頁）を参照。木村謙次は「北行日録」で、松前の人々が鎖国の禁を破り、密かにロシアと交易していると指摘する（同書，249-250頁）。

90) 「蝦夷草紙後篇」（北門叢書第三冊），455頁。

に乗せて送り遣し候」と書かれている⁹¹⁾。

絵舸を出帆したイギリス船は強い海流と風に苦しめられながら、一週間を費やしてようやく津軽海峡を通過し、新暦8月31日、松前沖に達した。航海記のこの日の記述には、松前市中では「武装した一隊が整列し、あたかもわれわれの上陸を待ち受けるかのごとく軍旗をはためかせていた」と記され、このとき松前城下が臨戦体制にあったことが窺われる。プロートンは、はためく軍旗の美しい色彩と寺院の白い壁の対比を愛でながら、松前沖を抜けてタール海峡域に去っていった⁹²⁾。

英国船の2度目の来航は明らかに幕府の態度を改めさせた。来航のとき、藩主章広は参勤交代で江戸出府の途上にあったが、仙台藩領水沢に差しかったとき、幕府から出府に及ばず、直ちに帰国して異国船に対処すべしとの命を受けて国元に戻った。他方、道広には江戸への出府命令が出された。

その2年後、幕府は東蝦夷地を7年の年限を切って幕府直轄領とした。享和二（1802）年には蝦夷奉行⁹³⁾を設置するとともに、東蝦夷地を永久土地に、つまり期限なしの直轄化を断行した。文化四（1807）年、幕府はついに西蝦夷地を含む蝦夷地全島を幕府の直轄とし、松前藩を奥州梁川に転封、同じ年、松前道広を江戸にて永蟄居とした⁹⁴⁾。左金吾もまた「隠侯は外夷内通の志あれば、松前に置くべき人にあらず、…江戸に召され江戸永住に定まりて、その害を除くべし」との意見を具申ししていた⁹⁵⁾。

幕府の方針転換は英国船来航だけがその原因とは言えないが、2年続きの来航が重要な転機になったことは間違いない。寛政十（1798）年、幕府が勘定奉行石川忠房率いる180人からなる大規模な蝦夷地調査隊を派遣したのは、その直近の帰結であったように思う⁹⁶⁾。

91) 「通航一覧」巻之二五四、366頁。ちなみに、プロートンの航海記（205頁）と日本側史料の記述を比較すると、腑に落ちない点がある。航海記の1797年新暦8月21日の記述には、プロートンらは「日本の友人たちに別れを告げ、湊を出た。彼らは胸をなで下したようであった」とある。通航一覧と蝦夷草紙後篇にはイギリス船が取るものもとらず、慌ただしく出航していったさまが描かれているが、プロートンの記述にはその印象がない。また、プロートンはどうやって手勢の接近を知ったのか、占い説、望遠鏡説（絵舸から佐原までは海上約35キロメートル）、あるいは加藤肩吾内通説がある。

92) 『プロートン北太平洋航海記』、210頁。

93) 同年のうちに箱館奉行と、5年後に松前奉行と改称された。

94) 松前藩が蝦夷地に復領するのは文政四（1821）年、翌年、道広の永蟄居も解けた。ペリー来航を経て、安政五（1855）年箱館が開港されると、蝦夷地は再び直轄化された。そのとき松前藩は松前半島以外の蝦夷地領を召し上げられ、再度梁川に領地をあてがわれた。『松前町史』通説編第一巻下、1143-1160頁参照。

95) 墨斎奇談、32頁。また、小野春夫『日露国防史 第一（徳川中世期の苦闘詩篇）』、東邦書院、1943年、205頁参照。

96) 板坂耀子（編）『近世紀行文集成』第一巻蝦夷編、10頁参照。

X 真偽の在りか

プロヴィデンス号来航と松前藩、幻影のロシア、北辺の小藩が世界とふれあったこの物語はここで終わる。

最後に異例ではあるが、本来なら冒頭に置くべき研究小史を最終節に付して、本稿の締めくくりとする。ここまで保留にしてきた問題、すなわち地北寓談と、その作者大原左金吾の評価についての考察である。この「奇書」がどれほど史実に迫るものであったか、筆者の考えを述べる。

地北寓談は、松前道広のロシア内通疑惑や臣下氏家源治の妻女を籠絡しようとした企みなど、滅多にない秘話を伝えながら、基本的な史実をも提供するという二面性を持った書物であったため、毀誉褒貶にさらされることとなった。

この書物が幕府要路に提出された直後、最初の批評をおこなったのは林大学頭だいがくのかみ述斎であった。述斎は昌平坂学問所（昌平黌）を主宰し、幕府教学行政の重鎮であったので、老中水野出羽守忠友からこの書物の批評を求められ、次のように答えた⁹⁷⁾。

匿名述作の寓談一覽仕り候ところ、事実を記し候は虚誕にもこれあるまじく相見候。事実も御座候えども、一体よほど取り繕いて、面白きようにしなし候事多く、畢竟一種の書を残し候心得にて、みだりに文章を飾り、覽者の賞を得申したき心底と相聞こえ申し候⁹⁸⁾。

この評価につづいて述斎は、左金吾の人物評を「小人にて、いささか学文を加え…ついに功名に志し、事を生ずるを好み候輩たること」明らかであり、「かれこれ伝え聞き仕り候ところ、一向放蕩者にて、松前にても信用は仕らぬよし」、「ともに事を謀るべき人才」とはとても思われずと書いている⁹⁹⁾。厳しい評価である。「ともに事を謀る」とはこの場合松前藩、あるいは松前道広への対処ということであるが、述斎は、左金吾の「怪しげな」書物を根拠に、あるいは少なくともそれを参考にして、幕府が松前藩に事を起こすべきではないと忠告しているように聞こえる。

しかし同時に、述斎が地北寓談をまるごと「虚誕の書」とは認定していないこと、つまりそ

97) 井上通泰『南天莊雜筆』、春陽堂、1930年、25頁及び『大原歴史散歩』79頁参照。

98) 地北寓談解説、41-42頁。

99) 地北寓談解説、41-42頁。

ここに一定の事実が盛られているとみなした点は重要である。筆者が先に二面性と評した特徴であるが、地方史の分野でこの書物が史的根拠としてしばしば登場する背景に、地北寓談がそのような視点から腑分けされて用いられてきたことが推測される。

林述斎のこの厳しい評価は、どちらかといえば書物に対して以上に、文人としての左金吾の人格に向けられていたように見える。そしてこの左金吾評に関しては考慮すべき事情がある。

『南天莊雜筆』という著作に小論「浪人大原左金吾」を収めた明治期の学者井上通泰¹⁰⁰⁾は、明治四十五年に加藤扶桑（房蔵）が書いた論文「松前氏露國と密謀の説」¹⁰¹⁾に疑問を呈し、いくつかの論点を並べた¹⁰²⁾。井上がまず指摘するのは、松前道広が林述斎のかつての門人であったことであるが、その事情は道広告発の書である地北寓談の評価、また、とくに左金吾という人物に対する評価に何らかの影響を及ぼしたことが示唆されている¹⁰³⁾。井上は、幕府が告発を誣告とみなしたのなら、なぜ左金吾にお咎めがなかったのかとも問う¹⁰⁴⁾。先述のとおり、左金吾は事後、幕命で中山備前守信敬に預けられ、扶持取りの身分となって数年を江戸で暮らした。こうした処遇が誣告者にはふさわしくないという論は一定の説得力があるだろう。

林述斎は、実のところ、書物のみを通じて左金吾を認識したわけではなさそうである。寛政年間のはじめ、述斎門弟の渡辺松太郎という人物が学監として松前藩に赴いていた。井上によれば、渡辺は左金吾を藩政に害をもたらす「姦人」とみなして交際せず、左金吾が提言した商船税政策などへの反対意見を藩主及び隠侯道広に上訴した。この言がもし容れられねば「辞職して江戸に帰るべきの決心」を示したと井上が紹介するように、断固たる弾劾であった¹⁰⁵⁾。

渡辺と左金吾はともに松前藩に招聘された学者である。本来なら交流があつて良さそうなものだが、地北寓談に渡辺松太郎の名がまったく出てこないことからすると、左金吾もまた渡辺を無視ないし敵視していたかと推測させる。

述斎の批評のなかに「かれこれ伝え聞き仕り候ところ、一向放蕩者にて、松前にても信用は仕らぬよし」という一文があることはすでに述べた。述斎は、地北寓談に書かれている松前藩の内情とは別に、どうやって藩内の事情を知ったのか。「かれこれ伝え聞き仕り」とは一体何

100) 民俗学者柳田國男の実兄で国文学者、医師で歌人でもあり、南天莊はその号である。

101) 加藤扶桑は京華日報社の記者、論文は同社発行の雑誌『世界』第93号、1912年2月、29-35頁。加藤は同じ雑誌の第96号（1912年5月）の60-63頁に続編「松前氏露國密謀誣説の補遺」を発表している。

102) 『南天莊雜筆』が昭和五年出版なので、井上と加藤の議論は時代に隔たりがあるように見えるが、井上の左金吾論は明治四十四年の講演の速記がもとになっているから、両者はほぼ同時代の論考といえる。井上通泰『南天莊雜筆』、17頁参照。

103) 加藤も道広が述斎の門下にいたことを知っていたが、それが道広を擁護する方向に作用したとは考えなかった。加藤扶桑「松前氏露國密謀誣説の補遺」、62頁参照。

104) 井上通泰『南天莊雜筆』25-26頁。さらに加藤扶桑「松前氏露國密謀誣説の補遺」62頁参照。

105) 井上通泰『南天莊雜筆』、24頁。

のことか。もっともありそうなのはこの渡辺が情報源であったことで、そうであれば左金吾が好評されるはずはなかった。

学問の泰斗による最初の地北寓談評、そして大原左金吾評がこれほど否定的であったことは、同時代の文人たちにも、後世の学者にも小さからぬ影響を残したものと思う。森銑三の研究によれば、蒲生君平、太田錦城など、同時代の著名な文人たちが左金吾を「姦人」として非難し、立原翠軒のもとで左金吾の告発に立ち会った藤田幽谷もおそらくその見方を共有した。しかし、同じく告発の場に居あわせた小宮山楓軒は「才識も人に過たるものなれば、備州も殊に信仰ありしなり」と左金吾の人物を認めていたという¹⁰⁶⁾。備州とは告発後に左金吾の身柄を預かった中山備前守信敬のことであるが、左金吾への評価は、同時代人のあいだでもこのように割れていたのである。

明治期の加藤扶桑と井上通泰の研究についてはすでにふれた。加藤は京華^{けいか}日報社の記者、井上は医師で、南天荘の号をもつ歌人にして国文学者であった。

加藤は最初の論文「松前氏露國と密謀の説」で、松前道広がラクスマン来航のときに「幕吏の目を掠めて露使と密約の事あるべしとは常識に於て認むべからざるのみならず其等の形迹全く之なく¹⁰⁷⁾」、ロシア側の記録にもそれらしきものがないとしてロシア内通説を全面的に否定するが、地北寓談そのものは「反面の事情を知るには囂強の材料たるを失はす」と述べ、さらに、文化四（1806）年にフヴォストフ・ダヴィドフ事件¹⁰⁸⁾が勃発したときには「地北寓談の薬力は…多少の利き目ありしならん」と指摘した。地北寓談の本旨を否定し、細部には事実が宿るとするこうした見方は、現代に至るまで地北寓談を扱う論者にしばしば共通する姿勢であり、いわば常識のフィルターを潜らせてこの書物を安心して使える史料にする手続きであった

106) 森銑三「大原左金吾」, 500-503 頁参照。小宮山楓軒に関しては、山川菊栄が「精励な考証家」と呼んで、その学問の実証的態度を賞賛した。（山川菊栄『覚書 幕末の水戸藩』, 17 頁）。山川がそのように評した小宮山楓軒が終生左金吾の人物評価を変えず、彼自身が聞き取りに立ち会った墨斎奇談を否定しなかったことは書き添えておきたい。

107) 加藤は「地圖を露人に密贈せりと云うの事實はその痕跡の認むべき者なく」と述べているが、英国船での松前藩士たちとプロートンのおおらかな地図のやりとりは、傍証ではあるが、「その痕跡」と言ってさしつかえなかろう。加藤扶桑「松前氏露國と密謀の説」, 33 頁及び『プロートン北太平洋航海記』, xix 頁参照。

108) 「文化の露寇」。1804 年に長崎に来航したレザノフが、江戸幕府の交易拒絶の回答に憤慨して、1806（文化三）年から翌年にかけて配下のフヴォストフ大尉らにサハリン島（樺太）、エトロフ島などの日本人集落を襲撃させた事件。

ともいえる¹⁰⁹⁾。

第二論文「松前氏露國密謀誣説の補遺」では、なぜ左金吾が道広を告発したかが旧松前藩士の証言をもとに考察される。地北寓談が事実を記録したものでないとするれば、それは創作物ということになり、そうであれば相応の重さをもった創作（捏造？）の動機が必要になるからである。その論を要約すれば、左金吾が松前にてさまざまな提言をするも一向に取り入れられることがなく、むしろ藩の諸士からの反感が募り、そうした状況下の失意がもともと「奇計を好む」人格と絡みあって、告発の書にたどりついたとする。この分析は、場合によっては松前道広を死地に追いやりかねなかった深刻な告発の動機づけとしてはあまりに軽すぎるという印象は否めない¹¹⁰⁾。

井上通泰は地北寓談を「大原左金吾が松前で遭遇した小説よりも奇なる事実を書いたもの」と評し、「まさか事実ではありますまいがさういふ事が書いてある」と少し慌てて弁明を書き添えている¹¹¹⁾。「小説より奇なる」文献に接したとき学者は心にブレーキをかけがちになるもので、井上の反応はそうした心理の表れといえる。ここに見える否定と肯定の見方のうち、井上の論には加藤論文よりも肯定の要素が若干色濃い。井上がそちらに振れたのは、先に紹介した加藤への疑問点に加えて、事後に幕府から松前藩に下されたお咎めが軽くはなかったことによる。

井上は「地北寓談に（左金吾が）書いた如きことは無かったらうが咎の一通りでは無かつたといふことは察せられる」と言い、道広に対する処罰も「隠居の人を江戸に留置したのは既に尋常のことではない」と書いた¹¹²⁾。享和と文化の年間（19世紀初頭）に幕府が松前藩に下した諸措置から逆算して、地北寓談も一概には否定できないと井上は考えた。しかしこの肯定は、地北寓談に書かれたロシア内通の説を事実と推定したというよりは、幕府がこの書物をそれなりに重く受け止めたという点を肯定したという意味であろう。

1989年に蠣崎波響の評伝を著した中村真一郎は、「道廣と呑響」という一章を設けて、地北寓談をめぐる諸問題を詳述しているが¹¹³⁾、左金吾と地北寓談に対する評価は辛い。アダム・ラクスマンの来航に関する道広と左金吾の対話を評して、中村は「道廣の方が遥かに、内外の政情に通じていた様が判り、又、呑響（左金吾）が背伸びをして、賓師としての面目を保とうと

109) こうした姿勢の他の一例をあげると、昭和十八年に出された小野春夫『日露国防史 第一』には左金吾の告発を聴いた藤田幽谷、小宮山楓軒が松前道広の問題に何らの提言をしなかったことをもって、彼らが地北寓談を信じなかった証左としているが、そう認定する根拠は示されておらず、むしろ事態の推移が地北寓談の記述に沿うものであったことが語られている。同書、204-205 頁参照。

110) 加藤扶桑の論文二編の書誌については註 101 を見よ。

111) 井上通泰『南天莊雑筆』、4 頁。

112) 同上、10-11 頁。

113) 中村真一郎『蠣崎波響の生涯』。「道廣と呑響」はその第十章（357-386 頁）。

している様子がうかがわれる」と述べ¹¹⁴⁾、道広のロシア内通を推論する左金吾の「二十ヶ条」¹¹⁵⁾について「どの個条も子供だましのように、呑響という人物の頭脳の粗雑さにあきれる」と書いている¹¹⁶⁾。人物評のこの厳しさは林述斎のそれによく似ているが、中村は述斎を「さすがに昌平黻の学長の見識を示して見事なもの」と称賛しており、評価の類似は自然でもあろう¹¹⁷⁾。

他方、書物への評価は、全体として厳しい立場でありながら、人物評ほど全否定ではない。「こうした陰謀（道広のロシア内通）が実在したかどうかは、大いに疑わしいのであるが、今は『地北寓談』の記述に従って、その大略を述べてみよう」と中村は書き、地北寓談を叙述の根拠として用いることに躊躇していない¹¹⁸⁾。ここから先、書物への評価はあまりなく、人物への否定的評価でこの章の叙述は終わる。書物をはっきりと否定することなく、否定的人物評で言外にそれを語るところも述斎の批評とよく似ていると思う。

この本には蠣崎波響の評伝では収まらない諸問題が広く論じられていて、教えられることが多い。しかし気になる点もある。

道広が臣下の妻女よしに告白した箇所は、地北寓談においてももっとも疑念を抱かれて然るべき一節である。よし女が左金吾に語った証言について、中村は「男が女を口説く時、自分の夢を現実のここのようにかたるのは日常ありふれたことであって、ロシア側の証言と照らし合わせなければ、ただの隠居の壮語に過ぎないかも知れないのである」と言う¹¹⁹⁾。この見解は、地北寓談に描かれたロシア内通説の核心部分が、左金吾から出たのではなく、道広の壮語の結果かもしれないと説明しているであるが、中村の行論では、左金吾の別書「北地危言」への批判、大田錦城らの左金吾への非難を経由して、曖昧なままに左金吾の人格否定へと帰着する。ここにねじれないしは分析の不徹底があると思う。

2010年、渡辺京二が『黒船前夜』を発表したが、そこにも大原左金吾、松前道広、地北寓談をめぐる詳しい叙述がある¹²⁰⁾。この本にも教えられるところは多いのだが、こと地北寓談の真実性に関しては少し恣意的な扱いが気にかかる。

渡辺は地北寓談を評して次のように言う。「この書物は甚だ信用できぬ性質のものだけれども、談話については疑う理由がない¹²¹⁾。」この「談話」とは、ラクスマン来航事件に関連して、道広が左金吾に語ったロシア人評のことであるが、談話というよりは道広と左金吾の対話とい

114) 同上、374 頁。

115) 地北寓談、219-230 頁。

116) 『蠣崎波響の生涯』、381 頁。

117) 同上、382 頁。

118) 同上、377 頁。

119) 同上、382 頁。

120) 洋泉社。副題に「ロシア・アイヌ・日本の三国志」とある。

121) 同上、183-184 頁。

うべき箇所である。

地北寓談はほとんどの箇所が左金吾と誰かの対話で構成されているが、もっとも多くを占めるのが道広との対話である。そこで「談話については疑う理由がない」とすれば、2人の対話のうちで道広の部分だけが真実とするのは考えにくい。対話において語られる道広の発言を事実だとするなら、左金吾の応答もまた事実と見るのが自然で、他の対話、例えば左金吾と蠣崎波響、あるいはその他の松前藩重臣たちとの対話も現実にあったことの記録である可能性が高いというべきである。左金吾と氏家源治、その妻よしとの対話もおそらく同断で、そこに虚構が入り込んでいるとすれば、中村が指摘するように、左金吾というより道広の心中から発したことをよし女が語り伝え、左金吾が記録したということではなかろうか。

渡辺は、地北寓談が「甚だ信用できぬ性質」であると考え理由に直接言及しておらず、おそらく史家としてのいわば常識的判断にしたがって、地北寓談で語られる道広ロシア内通疑惑の内幕を信用できないと断定した。だが、当時の道広の内面にふれる文献は他に存在しないので、地北寓談を素通りしては叙述が困難であった。「談話については疑う理由がない」というアプリアリな断定は、道広の発言を史料に取り入れるための一種の方便であり、筆者が恣意的と感じるのはそうした点である。

地北寓談、大原左金吾、そして松前道広について、書誌学者森銑三は次のように述べる。

大いに成すところあらむとして松前に至つた左金吾は予期に反した。そして寂しく同地を辞した。その松前道広に就いていふものに、私等はどれだけ信を措いてよいのか、なお研究の余地があらうと思はれるが、道広が尋常の人物でなかったことは、他の史料からも推測せられる。道広は乱世の雄ともいふべき資を持って、治平に生れ来つた人だつた。露国に内通などいふ事實は、他に傍証を見出すことが困難たるにもせよ、左金吾のいふところは、一概に否定せらるべきではあるまいと考へられる¹²²⁾。

また、松前町史でこの箇所を担当した史家榎森進は、左金吾と地北寓談に対する林述斎の手厳しい評価を見て次のように述べる。

(地北寓談は) その外見こそ林のいう通りでも、…道広の心事や著者の個人的判断にもとづく細い記述を除けば、書中に盛られた事実は、殆んど史実に近いものであつ

122) 森銑三「大原左金吾」、486頁。旧字体は現在の漢字にあらためてある。

た。地名や人名は変名を用いているものの、その多くは他の史料によって実在の地名・人名に比定することが可能であり、歴史事象に関する説明も、その多くは他の史料によって裏づけることも可能であり、こうした点からも、この期の松前藩内の動向を知る史料として貴重なものである¹²³⁾。

いずれも厳密な実証的研究者の発言である。私自身の理解もこれらに近い。我々は林述斎の左金吾評価から少し自由になるべきであろう。また、常識論に立つ否定も立ち止まってもう一度熟考すべきであろう。地北寓談のなかで、左金吾の思索の箇所、例えば中村が例示する左金吾「二十ヶ条」の推論などがいささか針小棒大の議論であることには同意するが、他方、対話の箇所には多くの場合、左金吾の眼に映じたかぎりの姿で「ありのまま」が記録されているのではないかと筆者は考える。

地北寓談が江戸幕府の中枢に届けられたことに疑いはない。もしこの書物の大部分が左金吾の創作であったとすれば、松前道広を死地に追いやりかねず、松前藩全体を窮地に立たせかねない告発の深刻さからして、その行為は命をかけた捏造とならざるをえず、左金吾がそのような蛮勇に走ったということの方が、「常識的」にはむしろありそうではなかったように思う¹²⁴⁾。

(了)

123) 『松前町史』通説編第一巻下、96 頁。

124) この草稿が完成にさしかかったころ、熊本大学で 17 世紀に熊本藩が薩摩藩に放った密偵の報告書が発見されたという小さな新聞記事を目にした。密偵村田門左衛門が語る報告書には、「金山開発の凍結や異国船警備、琉球・八重山の支配、城の石垣の状況、宗教政策など」の藩内情勢が語られるとともに、スペイン侵攻の噂があったとも言及されているという。薩摩藩にはもともと密貿易の噂があり、閉鎖性と秘密主義、一個の独立国のような印象が強かったとも、この記事には書かれている。17 世紀と 18 世紀、スペインとロシアという違いがあるにせよ、日本列島北端と南端の国境の藩によく似たエピソードが囁かれていたという事実を興味深く読んだ。「薩摩藩を探れ—熊本藩の「密偵」報告書」、朝日新聞、2023 年 7 月 3 日（月）、第 13 版。